

---

# ともだちのしるし

たかゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ともだちのしるし

### 【Nコード】

N5580P

### 【作者名】

たかゆき

### 【あらすじ】

如月美胡きんづき みこは、美術部員で高校二年生。才色兼備で学校のアイドル、藤ノ宮琴葉ふじのみや ことばに憧れている。琴葉と友達になってみたくても、地味で大人しい自分では彼女にとって迷惑だと、美胡は常に思っていた。ある日、美胡は一年生の鈴川白すずかわ しろと出会う。彼女の第一声は「友達になつて！」だった。

周りの事を考えない白の行動を、煩わしく思う美胡。そんな美胡の気持ちを知ってか知らずでか、白は美術部の活動に顔を出すようになる。始めのうちは彼女を好きではない美胡だったが、次第に心を

開いていく。

ところが、ある事を切欠に白は美術室に来なくなってしまう。美胡は、白の同級生に彼女の事を聞くのだが……。

美胡と白の、切なくてあたたかい一ヶ月の物語。

## ある光景「絶望」

「はあ、はあ……ここにも、いない」

草むらから這い出した少女は、力なく立ち上がると荒くなった息を一度呑み込んだ。年の頃は七、八才といったところか。赤いランドセルが、その背中にはまだ大きかった。何かの葉で切ったのか、右手の人差し指からは血が滲んでいた。左の手のひらには、石ころが二つめり込んでいる。それを無造作に服で払い落とすと、土で汚れたスカートや顔に張り付いた草切れもそのままに、小さな身体をまたうずめた。

その小高い丘には、盆正月に近隣の住民が参拝する位であろう小さい神社……小さいといっても、少女にとっては大きいものだったが。そして、所々剥げ落ちてはいるものの、まだその色を鮮明に残している朱色の木鳥居が建っていた。暮れようとしている日の光が、その色をさらに鮮やかに照らし、神々しさを増していた。

「はあはあ、はあ……、どこに、行っちゃったの？」

境内や木々の間、他にも目につく場所は探したはずだがどこにもいない。神社も覗いてみたが見つからない。いつもは、決まってこの時間に少女を待っていたのだが、急にいなくなってしまったのだ。あれからもう一週間にもなる。

「もう、いないのかな……、もう会えないのかな」

そう言っただけで俯いた目には、真つ黒になつた靴が映つた。買つてもらつたばかりだったから、叱られるかも知れないと思つたが、今の少女にとってそんな事はどうでもよかつた。会えない不安の方がはるかに大きかつたからだ。それは、自分の意思とは無関係に大きなうねりとなつて、頭の中から指先から髪の毛に至るまで、全身のあらゆる場所へと容赦なく流れ込んでいった。そして『自分』という器から溢れ出していく。

「うっ、もう、ひっ……会え、ないの……？」

頬を涙が濡らしていた。少女にはもうそれ以上、押し留めておく事は出来なかった。

「うわあああああ！」

その場に崩れ落ち、泣き叫んだ。埋め尽くされた不安が、もう会えないのだ、一緒に遊ぶ事は出来ないのだという絶望へと姿を変えていく。

鮮やかに照らされた神々しい朱色は、もうすぐ消えようとしていた。

四月五日（月）「友達だなんて……」

「……で、あるからしてー、常に白百合女子高校の生徒としての自覚を持ち、ナンタラカンタラ……」

（あー、まだ終わんない）

（校長、話長いよ）

始業式で体育館に整列した二、三年生500名の耳は、校長の言葉には向けられていない。私、如月美胡きんづき みこもその例に漏れていない。いつもの長話しに付き合わされて、みんなうんざりしている。さらにその1000の瞳のうちの800は、舞台上上手側の最前列に並んでいる、一人の女生徒に注がれている。あ、800というのは適当な数字。この中の殆どの人がきつとそう。そして、その内の二つは私のもの。斜め前、手を伸ばせば届くかもしれない距離にその人はいる。高校一年の時から憧れている人。その人と同じクラスになつてしまった。これから一年間、同じ教室なんだな。でも、友達になんてなれない。だって彼女は、私と違う世界に住んでいるから。

「では、先月行われた全国選抜高校テニス大会個人戦で見事優勝した、二年A組藤ノ宮琴葉君、壇上へ」

先ほどから校長よりも注目を浴びていた藤ノ宮さんが、壇上へと進み出る。私の瞳はその優雅な一挙手一投足を逃すまいと、背伸びをしたり身体をよじらせたり少し屈んだりする。胸の前で握った両手に、自然と力が入った。

「待つてましたー！」

ずっと独演会が続いていたのだから、そんな歓声があがるのは、うん仕方がない。

校長から賞状と優勝トロフィーを受け取る。体育館を埋め尽くした拍手の方へと向き直った時、背中まである瑠璃色の髪が翻った。それは何処か異国の、太陽の光に揺れる紺碧の海を思わせた。端正な顔立ちと、ミニスカートからスラリと伸びた肌。その麗しくて凜

とした立ち姿は、例えるなら一輪のブルーローズのよう。正に“学校のアイドル”がそこにいた。注目を浴びるのも、人気があるのも当然だと思う。きつと初めてこの光景を目にした人は、このあと『この度は応援して頂きありがとうございました。みなさんのお陰で優勝する事ができました』と、深々とお辞儀をする姿を思い浮かべるのだろうけど、それは少し違う。いや大分……かな。

彼女が一步前に出る。拍手が止み、時間が止まったかのように静まり返った体育館は、代わりに百メートル走のスタート前に似た、あの緊張感に包まれる。右手に持ったトロフィーを高く掲げる。みんな息を呑み、その時を待つ。

「みんなー！ 応援ありがとー！ー！ー！！」

「おめでとー！ー！ー！！」

「きゃあー！ー！ー！！」

割れんばかりの大喝采。私はいつも、その歓声に圧倒されるだけ。拍手と、おめでとという気持ちを中心の中で飛ばすだけ。拍手と歓声の中、壇上から降りると生徒達とハイタッチを交わしていく。今手を上げれば、私にもハイタッチを交わしてくれるだろうか。『パァン！』と気持ちの良い音を響かせてくれるのだろうか。上げてみようか。私が手を上げればもしかしたら……。私が上げれば……。

そう、まず私自身が手を上げなければならぬ。私が先に行動を起こさなければならぬ。私が先に。そんな事できない。とてできないよ。例えば、どうしてか手を上げる事ができたとする。でも、それに気付かないかも知れない。そうだよ、こんなに沢山の人の中で気付くはずないよ。マイナスに働いた意識に、私は容易く支配された。上げかけた手を静かに胸の前へ戻すと、もうそこから上には少しも動かなかった。元の列に戻った藤ノ宮さんの後ろ姿に、音にならない拍手を送った。そして、もう一度おめでとを飛ばした。

手を伸ばせば触れそうな所にいるのに、ほんの二メートルが私には遠過ぎるんだ。ううん、それは違う。たとえ一メートルでも、十

センチでも同じ事。結局は、私自身の問題なんだ。

始業式の後には授業がないから、ホームルーム後の教室には春休みが少し混じっている。その、少し桜色を帯びたようなフワフワした空気が、みんなの口調と足取りを軽やかにしているみたいだった。

「じゃあ、また明日ねー」

「ねえ、これから駅ビルのCDショップに行こうよ」

美術部に所属している私は、同じ美術部員の七瀬愛華ちゃんとお弁当を食べようとしていた。美術部は週三日、月・水・金曜日に活動している。二、三年生で八人の部員。今年の新入生には、せめて二人は入部して欲しいな。そして愛華ちゃんは、私の一年生からの友達だ。彼女に言わせると、私は頼りなくて、風に吹かれたら飛ばされそうだからほっとけないらしい。

その愛華ちゃんが、お弁当箱から玉子焼きをつつく。でも、それが口に入る寸前で動きが止まった。

「どうしたの？」

向かいに座っている私に愚痴をこぼす。

「くっそー、あたしもCDショップ行きてー！ 今日、SMOPのCD発売日なのに。部活終わったら行こうよ、美胡」

「終わってから行くの？ 明日は部活ないんだし、予約してるなら今日じゃなくても……」

「ダメダメ。発売日に手に入れるのがファンとしてあるべき姿なの！」

玉子焼きが刺さった箸を、授業で使う指し棒のように向けてくる。「もう、行儀悪いなー。じゃあ終わってからね」

愛華ちゃんのそれより一回り小さなお弁当箱を開く。

(ファンとしてあるべき姿、か……)

「それはそうと、ウチのアイドル同じクラスじゃん」

そう言った視線の先には、同じくお弁当を広げている藤ノ宮さんがいた。周りにいる数人の生徒と話をしていて笑顔は、私には眩しく映った。多くの生徒がその美しい容姿に惹かれるのは違って、その類まれな才能と美貌を鼻にかける事もなく、誰とでも同じく親しげに接する。しかもごく自然にそれが出来てしまふ彼女に憧れている。

「美胡、憧れてるんだつたら友達になつてみれば？」

口に入れようとしたウインナーを落としそうになる。

「な、何言ってるの？ 駄目だよ私なんか。引っ込み思案だし、藤ノ宮さんみたいに運動も出来ないし、明るくないし。迷惑なだけだよ、住む場所が違う人なんだから……」

「そんなことないつて。まあ運動音痴は無理でも、可愛さは美胡だつていい線いってるよ。チョット立つてみ」

「ええー？ 立つの？」

仕方なく立つ。『美胡だつていい線いってるよ』その後立たせるのは、何をしようとしているのか大体予想がついた。愛華ちゃんは顎に手をあてて、私の頭から足までを目で一周二周させながら、「ふむふむ。うん、目はパツチリ二重で眼鏡も似合ってる。黒髪もサラサラだし、スタイルだつて悪くはない。あー、胸は完全に負けるか」

「それ、フオローしてるのか貶してるのか分からないよ」

ため息をついてまた座り、食事を再開した。その間も、さっきの愛華ちゃんの言葉がまだ頭に残っていた。

『友達』という単語。『友達』という関係。友達、ともだち……。

そんなの無理だよ。頭から振り払うように、窓の外に目を向けた。校舎の脇に並んでいる桜並木がある。はらはらと散つた花びらが、地面に絨毯を敷き始めている。ふと、二羽の鳥がその絨毯に止まっているのが見えた。くっ付いたり離れたりと、それはまるで遊んでいるようだった。

「あの鳥、友達なのかな……」

なんだか、私の方が小さい生き物のように思えた。

## 四月七日（水）「突然の申し出」

授業が始まってから二日、気付いた事がある。それは、藤ノ宮さんも授業を受けるんだという、当たり前過ぎる事だった。だって今までの一年間は、体育館で表彰される姿と、廊下と、校舎裏にあるテニスコートで見かけるだけだったから……。

授業中、何度も目が向いてしまう。あ、黒板消されちゃった。まだ途中までしかノート取っていないのに。藤ノ宮さんは、私と同じ教科書、同じ黒板を見て同じ授業を受けている。なんだか不思議な感覚だ。でも、同じ事をしていても、成績が常に学年トップクラスの人と、平均をやっと上回る位の私では、やっぱり違うんだな。結局そつという結論に達する。

放課後、私は愛華ちゃんと部活へ行くため廊下へと出た。下校する人や部活へ行く人でごった返すその中で、一際賑わいを見せている一角があった。

「お、藤ノ宮さんだ。ホント人気あるよなー」

「うん、そうだね」

「行ってみなよ」

当然、私の答えは決まっている。頭の中に準備されているその言葉の口にしようとした時、愛華ちゃんは『ほら』と両手で背中を押してきた。その行動は全く予想していなかったから、踏ん張りの利いていない体のまま、けつまずくようにその距離を縮めた。

「きゃー！」

い、今なんて！？　なんか変な声が出ちゃったよ！　藤ノ宮さんとの距離はまだ五メートル位あるのに、自分の意としない接近は、私を慌てさせるには十分だった。今度は目の前に突き出されるのではないかと、慌てて振り返った。

「や、やめてよ愛華ちゃん！」

「ごめんごめん。部屋行こっか」

「う、うん」

テニスコートとは逆方向にある美術室へ向かおうとした時、足が鉛になったかのような重さと、全身をギプスで固められたかのような不自由さを感じた。自分がこんなに緊張していたのかと気付いた。歩行という動作を意識的に四肢へ命令し、その動きが正しくなされているかを確認する。それを何度か繰り返していくと、少しずつ鉛とギプスが外れていった。自分の体が少し軽くなったような気がしてちよつと嬉しいな、なんて思っていると、後ろで一際大きい声が聞こえた。

「おねえちゃ~~~~ん！ おね~ちゃ~~~~ん！」

藤ノ宮さんのファンの一人なのかな。ところが、声がどんどん大きくなってくるのに違和感を覚えた。その声が私のすぐ後ろに迫った途端、背中に衝撃を受けた。

(倒れる!?)

廊下が迫ってくる。このままでは間違いなく倒れる。手を出して受け身を……駄目、もし怪我して筆を握れなくなったら絵が描けなくなる。それなら身体を半回転させて、せめて背中を下にすれば大丈夫かも知れない。そうだ、それでいこう。あ、一つ重要な事を忘れていた。私、運動音痴だった！

ビターーン！

そのまま前から倒れた。しばらく時間が止まった気がした。

「痛ったあー」

はっとして顔を上げる。手は何ともないみたい。身体は痛いけど、手が無事ならとりあえずは良かった。

「う、うう〜ん」

背中から何か聞こえた。さらにはつとする。背中に、締め付けられる感覚と重みがある。背中にくっ付いている何かがある。これを確認しようと、そのまま背中の何かと向かい合わせになるように体

勢を変えた。その正体は、肩口までの茶色い髪、白いカチューシャ、制服に結ばれたリボンは、一年生である事を示す青い色。そして、首にはリボン状で緑色のチョーカーが巻いてあって、そこには鈴が付いていた。

「おねえちゃん！」

「お、お姉ちゃん！？」

（だ、だれ？）

「おねえちゃん！」

「あ、あなたは誰なの？ 私はあなたのお姉ちゃんじゃないし……、  
そ、そもそもあなたの事知らないし、人違いじゃ……」

「うっん、知ってるよ」

「知って……る？」

彼女の言葉を理解出来なかった。当然だよ、目の前にいる女の子の事は全く知らないんだから。一応、これまでの十六年の人生で数えるほどしかいなかった友人の顔、従姉の顔、近所のケーキ屋に住んでいる沙羅ちゃん。中学時代の後輩の顔……。ほらやっぱりだ。思い浮かんだ顔を並べてみたけど、その中に目の前の女の子はいなかった。でも今は、この問題はとりあえず置いておいて、まずこの状況をなんとかしないといけない。

「あ……あの、と、とりあえずどいて欲しいんだけど。この体勢はちよっと……」

恥ずかしい。顔から火が出てる。注目されるのは嫌なのに。そう、廊下の真ん中で女生徒二人が抱き合っているんだから。違った、正確には抱き合ってるんじゃない。一方的に抱きつかれているんだ。た。そうだ、私は抱きついてない。勝手に抱きついてきて、こんな事になって。本当にいい迷惑だ。

「あつ、ごめんなさい」

ようやく離れてくれた。私も立ち上がり制服を手ではらう。

「あなたは誰なの？ 知ってるって言ったけど、私はあなたの事なんて知らないんだけど」

『あなたの事なんて』だなんて、思わず失礼な言い方をしてしまった。だけど、そんな事は気にも留めていないかのように、目の前の女の子は更に驚く事を言った。

「わたしの名前は白！ すずかわしろ 鈴川白！ おねえちゃん、白の友達になって！」

「……は？」

この反応は正解だと自分では思う。もっと良い反応が他にあるにしても、間違つてはいないはず。だって、たった一分にも満たないそんなほんの少し前に初めて会った女の子に、友達になってと言われたのだから。

「鈴川さん……えっと、ちょっと待って。友達って……」

「うん！ 白の友達になって！」

なんと答えたらいい？ いいよって言えばいいの？ いや、そんなの有り得ない。人の迷惑を考えずに後ろからタツクルってきて、いきなり友達になれる訳ない。じゃあ、断ろうか。でも、私と友達になりたい気持ちを見捨て、無下に断るのは何だか気が引ける。ああ、分からなくなってきた。そんな混乱した頭で考えた私の言葉と行動は、決して良いものではなかった。

「ごめんなさい！」

捨て台詞とも取れる言葉を発すると同時に、その場を逃げるように走っていた。

「待ってよ、友達になつて！」

ああ、どうしてこんな行動しちゃったんだろう。すごく失礼な先輩じゃないか。だけど、後ろで聞く声が近づいてこないのを感じてホツとしていた。前には愛華ちゃんの姿はない。私があんな事になつていたのに、愛華ちゃんが先に行ってしまった事は少しショックだった。

美術室のドアの前で、もう一度走ってきた方を見る。良かった、やっぱり追いかけて来てないみたい。気持ちを切り替えて、ドアに手をかけようとしたら自然に開いて驚いた。

「あ、美胡。どこ行つてたの？」

「愛華ちゃん、ひどいよ。先に行つちやうなんて」

美術室に入ると、まずは文句を言つてみた。それくらいは言つてもいいだろうと思つた。だけど、その答えは意外だつた。

「んん？ なにが？」

「なにが？ つて、私があんな目に遭つてたのに、先に行つちやうんだもん」

「あんな目つて？ あたしは、美術室に美胡が来ないから呼びに行こうとしたただけだけど」

あの状況を気付かなかつたのだろうか。そんな事より、その“あんな目”を話すのが先か。

「なにそれ、そんな事あつたの？ 全然気付かなかつたよ」

愛華ちゃんと、美術室の隅に置かれたダンボールの中から、飾るのに良さそうな作品を選んでいく。一枚の絵を手にとって品定めをする。

「あんなに思い切りタツクルされて廊下に倒れたのに、気付いてくれないなんて」

その絵を仕舞つて、隣の絵を取り出した。

「ごめんごめん」

絶対そう思つてない言い方だ。

「美胡つち、まな。部活見学に来た新入生が、入部したくなるような作品を選んでくれよ。飾り方もひと工夫して目を引くようにな」

「部長、入部したくなるような作品つてどんなのですか？」

「それは、まなのセンスに任せる」

「そんなキツパリと言われてもなー」

親指を立ててウインクしている部長を一瞥して、作業に戻る。

「だけど、いきなり抱きついて初対面の先輩に友達になつて、だよ？ 普通言わないよ、そんなの」

「んー、まあねえ。でもさ、嫌われるより好かれるならその方が良

「いじゃん。お、いい感じ」

「愛華ちゃんは、選んだ作品を棚に置き、親指と人差し指で写真のフレームを作ってその画を切りとった。」

「それは……、そうかも知れないけど」

「いいんじゃない？ なつても。おつ、これもいいねえ」

「え？」

「だからさ、友達になつてもいいんじゃない？ 今までにないタイプで面白そうじゃん」

「ええー！？」

確かに今までに会った事はないけど、できれば会いたくはないタイプ。人の事を一切気にも留めず、グイグイと自分を押し付けてくるのはちよつと苦手だ。それに、私は近所のお姉さんじゃないし、幼馴染でもない。あくまで先輩後輩の関係なんだから、友達とは違うと思う。あの時はびっくりしてあんな行動取っちゃって、それはいけなかったな、とは思うけど……。次に会ったら……。つて、できれば会いたくはないけど、次に会ったら、友達にはなれないと伝えよう。

四月九日（金）「友達ってというのは……」

そう、特別な事をしてきた訳じゃない。いつもの様に登校して、いつもの様に授業を受けて、いつもの様に藤ノ宮さんに見惚れてしまつて……。いつもの様に部活をした。ただ一つ違ったのは、また起るかも知れないという不安と緊張感が、常に私の多くを占めていた事。あの鈴川白という女の子の事を考えていたからだ。考えていた、というのは語弊があるかな。警戒していたというべきだ。

廊下に出る時は特にそう。この前タツクルされた廊下。横断歩道を渡るかの様に右、左、もう一度右を見て、彼女がいない事を確認してから出て行く。十歩進むごとにパツと振り返る。姿は見えない。右！ いない。左！ 隣のクラス窓。上！ は……さすがに飛んでは来ないか。そんな事を繰り返しながら、まるで不審人物のように進んでいく。教室にいる時も、時々廊下の方を見る。どこから来るか分からない。それこそ、トイレですら周りを気にしてしまう。

そんな事をずっとやっていたものだから、部活が終わった時にはドツと疲れた。

「どうしたの？　なんか疲れてるぞー」

「あ、愛華ちゃん。ううん、大丈夫だよ」

（今日は来ないのかも）

あとは帰るだけ。廊下を右に曲がると、沈みかけた太陽が西日となつて、思わず目を細める。愛華ちゃんやまばらに残った生徒達の姿が黒い影となつて、コントラストが奇麗だった。下駄箱に近付いていくにつれて、一日中張り詰めていた緊張が解かれていく。

「おね〜ちゃ〜ん！」

（え！？）

声は後ろから。それはみるみる大きくなって来る。早く振り返らないと昨日と同じ事になってしまう。でも、緩んだ緊張がその行動を遅らせた。振り返った時、声の主は目の前にあって、今度は前から抱きつかれた！

「おねえちゃん！」

「ちよつ……鈴川さん！ 待って……！」

何とか倒れるのは免れたけど、制止の言葉もお構いなしに私の胸に顔を押し付けてきた。その顔をグリグリ動かすものだから、

「あつ、ちよ……やだ、あん！」

な、なんとという声を出してしまったのか！ 顔から火が出るどころの騒ぎじゃない。これじゃあ昨日より恥ずかしいじゃない！ 私の顔はガス爆発の大火災になった。

「す、鈴川さん、落ち着いて！」

「おねえちゃん」

狙ったようにピンポイントで攻めてくる。

グリグリグリ、グリグリグリグリグリ……。

「んっ、やん……はうん！ と、とりあえず、あん！ 一旦離れてえー！」

「は〜い」

彼女が離れると、私は糸を切ったあやつり人形のように、その場にペタンと崩れ落ちた。

「はあはあ、はあ……」

胸に手を当て呼吸を整える。炎と化した自分の顔が少しずつ鎮火していくのを感じる。

「ふう」

落ち着きを取り戻し、目を開ける。そこには、

「おねえちゃん、大丈夫？」

子供のように無垢な眼差しの鈴川さんが覗き込んでいる。ぐつたりと力の抜けた身体をなんとか持ち上げた。

「あ、あのね鈴川さん……」

「おねえちゃん、友達になつて！」

(次に会ったら言つと決めたんだ)

「あの、鈴川さん、二つ言わせて。私は二年で、あ、あなたは一年生。先輩後輩の関係なんだから、“お姉ちゃん”じゃなくて、き、如月先輩つて呼ぶのが、普通だと思う」

「でもでも、おねえちゃんは白のおねえちゃんだから、おねえちゃんなんだよ？」

「はあ？」

通じてない。彼女の言葉もさっぱり意味が解らない。

「じゃ、じゃあ二つ目。先輩後輩なんだから……と、友達とは、違ふと思うん……だよな」

「え、友達だよつて言つてくれたのに」

「い、言つてないよ！ そんな事。と、とにかく、私は鈴川さんと友達にはなれない」

(言つた！ ちゃんと言えた！)

「じゃあ、友達つてなあに？」

「え？」

そんな質問をされるとは思っていなかった。友達とは何か。改めて聞かれると難しいな。えつと、私の友達像か。友達像……。

「た、例えば、相手が何かを頑張っている時に応援してくれたり、困っている時に助けてくれる存在。それが友達……じゃないのかな」

「じゃあ、おねえちゃんが部活頑張ってる時は、白が応援してあげる！」

(……あれ？)

なにかおかしい。友達になれないと断つたはずなのに。この先の不安が募っていく。この子には、何を言つてもそれ以上のものが返つてきて、いつの間にか彼女のペースで物事が進んでいく気がしてきた。彼女はきつとそういうタイプだ。なんとか話を逸らしてみようと、気になっていた事を聞いてみた。

「その、首に巻いているのはチョーカーだよな？」

「これ？ これは、首輪だよ」

（それをチヨーカーって言うのよ）

「白の宝物なんだ」

チヨーカーに付いている鈴を、指で鳴らしてみせた。チリチリ、チリン。決して綺麗とはいえない、くすんだ音が聞こえた。良く見ると、殆ど茶色く錆び付いている。そんな風になるまで持ち歩くのだから、この子にとっては本当に大切な宝物なのだろう。

「美胡ー！ 何やってんの？ 帰ろうよー！」

靴を履き替えた愛華ちゃんが、昇降口で待っている。

「あつ、ちよつと待ってー。応援はしなくていいからね、いい？」

そう念を押してから、愛華ちゃんの後を追った。

## ある光景「不安」

少女は神社にいた。オレンジの光が注いでいる神社は威厳を纏い、少女を見下ろしている。今日で四日目。いなくなってしまった日、母親からの『きつとまた会いに来てくれるよ』という言葉が、少女の足を神社に向けるのだった。

だが、草むらや木々の間を覗いてみても見つからない。いなくなってしまった日のそれと変わらない風景が、少女の前に広がっているだけだった。

「また会えるよね？ 大丈夫だよ……？」

自分に言い聞かせるかのように何度も呟く。いつもの時間、いつもの場所。ここで出会い、ここで仲良くなった。その場所で、こんなにも突然に別れが訪れてしまうのか。

それを認めたくないという思いが、また足を、手を、瞳を動かす。何度も、何度も、何度もその行為を繰り返しては、何度も、何度も、何度も切り捨てられていく。

このままずっと会えなくなってしまうのではないか。そんな思いが頭をかすめていくごとに、少女の不安は大きくなっていく。

「もう会えなくなっちゃうなんて、そんなのいやだよ……」

その声は震えていた。

四月十二日(月)「応援」

今日から新入生の部活見学期間だ。早速、新入生が二人見学に来ている。部活見学といっても、大それた事はしない。展示された過去の作品を観たり、部員の作業を見学したり、質問を受けたり、閑談をする感じだ。結構のんびりとしている。

ただ、去年と違うのは新入生の手紙が握られている事。コーヒーとオレンジジュースを準備したんだ。少しでも新入生の緊張が和らいだらいいなと思って、私が何気なく言った呟きだったんだけど……。部長がそれを部活見学計画書に盛り込んで、見学に来た新入生に対して提供するなら良い、と許可が出たんだ。これって私のアイデア……。って言うていいのかなあ？ だから、その手にあるコップを見ると、何となく気恥ずかしかった。

「部長、じゃあチヨット行ってきます。三十分位で戻る……。かも、です」

「お、行ってこーい。部活時間内には戻って来いよー」  
「はい」

主に、油絵で植物や風景画を描く愛華ちゃんは、時々こうしてモチーフを探しに外に出る。でも、たまに夢中になると戻って来なくなっちゃう。いつだったか、戻って来ないまま部活が終わっちゃって。帰りに公園の花壇にいる所を見つけた事があつたっけ。

私は主に水彩で人物画が多い。もちろん風景も描くけど、それは人物を引き立たせる脇役として。それと、私はあまりモチーフ探しはしない。でも、全くしない訳じゃなくて、愛華ちゃんほどはしないという意味。どちらかと言えば、頭の中にあるイメージを紙に具現化していく感じだ。

その水彩画を描くための準備をしていく。水彩紙という、水彩画を描くための専用の紙があつて、幾つ種類がある。絵の具の滲み具合や発色がそれぞれ違って、描くモチーフによって適したものが

ある。もちろん値段も違う。高いのは買えないから、私が使っているのは真ん中位かな。その水彩紙を、水が張られたバットにそっと浸す。

カラカラカラ……。

美術室のドアが静かに、少しだけ開いた。愛華ちゃんかな、それとも新入生かな。でも、ドアは開いたけど誰も入って来ない。不思議そうに見ていると、ヒョコツと出てきた顔にぎよっとした。

(す、鈴川さん！)

キョロキョロと見回している。そして、私と目が合うと、私の面食らった顔とは対照的に、子供が大好きなオモチャを見付けたかのように、ぱあつと顔を明るくした。大きいため息をついてドアに向かう。

「部活には来ないですよ」

小声で制止する。できれば帰って欲しい。走り回るに決まってるんだ。転んだりして作業中の絵を台無しにしかねない。

「応援するの」

「ええ！？」

そうか、今気付いた。自分の時いた種とはいえ、少し後悔していた。今は部活見学期間。友達の定義を語ってしまった以上、その目的が応援だったとしても、形としては部活見学という事になる。部活見学に来た新入生を追い返すほどの説得力がある言葉を、私は持ち合わせていなかった。

「ん？ どうした、美胡っち」

「あ、部長。あの、見学したいという一年生がいるんですが……」  
中に入れるしかなかった。

「お、入部希望者？ うん、いいよ。大歓迎だよー」  
親指を立てる。

「みんなの迷惑にならないように、静かにできる？」

「うん、できるよ」

仕方がないか……。うるさくしたら帰ってもらおう。もう一度ため息をついて中に入れる。親ガモの後に続く子ガモのように、ピツタリと後ろに付いて来た。自分が作業をしているテーブルの椅子に着かせる。

「いい？ 静かにしててよね」

「うん。白、静かにしてるよ」

もう一度念を押して、また作業に取り掛かる。

「なにやってるの？」

いきなりテーブルに身を乗り出してくる。

「ちよつと触らないでよ。……これは“水張り”だよ」

「みずばり？」

「水彩画を描く為の前作業だよ。水彩画は、描いてると紙が波打って仕上がりが悪くなるから、それを防ぐために水張りっていう作業をするの」

水に浸された水彩紙に目をやりながら説明する。

「このまましばらく置いて、紙が水と馴染んだらこのベニヤ板に固定して、乾いたら水張りは終わり。そうすると、塗った時に多少たわみは出るけど、乾くと紙はピンと張って奇麗に仕上がるんだよ。分かった？」

「うん、よく分かんないや」

「あ、そう……」

この子は美術に興味があるんじゃないかと、単に私がやる事に興味があるだけじゃないか？

「そうだ、コーヒー飲む？」

折角用意してあるのだから、勧めないのは失礼だ。

「うん、いらない。白は飲めないから」

「そっか、オレンジジュースもあるけど」

「白は飲めないからいらないよ」

「え？ そう、なんだ」

コーヒーが飲めないという人は聞いた事があるけど、オレンジジ

ユースも飲めないのか。アレルギーでもあるのかな？ 他に出してあげられるものはないし、飲めないなら仕方がないか。

バットから水彩紙を取り出し、ベニヤ板に慎重に乗せる。

「ちよつと静かにしててね」

あらかじめ切っておいた水張りテープで、水彩紙の端を固定していく。

鈴川さんは私の言葉を守っていた。静かだった。視界に姿が入っていないという事は、椅子に座っているようだった。その時、部長が意外な事を言った。

「美胡っちー、ところで見学者はどうしたんだ？」

「え？」

（鈴川さんならここに……）

振り返ると、いるであろうと思っていた椅子に姿が見えない。

（あれ？）

美術室内を見渡しても、彼女の姿はなかった。今までここにいたのに。いつの間にか帰ったのだろうか。

「あ、あの、帰っちゃったみたいですよ」

「そうか。それは残念だ」

あんなに応援すると言っていたのに何も言わずに帰ったのは意外だったけど、帰ったのなら、それはそれで私は構わなかった。

四月十四日（水）「ニューズ」

入部届けは、学年、クラス、氏名と希望の部活名を書いて、直接顧問に渡す形になっている。基本的に希望の部活に入部できる。

鈴川さんは入部するのだろうか。それが一番の気がかりだった。美術に興味があるとはあまり思えなかったけど、入部届けが出されれば当然受理されて、美術部員として一緒に活動する事になるのか……。そう考えると気が重かった。

「はあ……」

窓の外を見ているのか、その前に置かれているイーゼルを見ているのか、見ているようで実は何も見ていないのか。目を宙に彷徨わせて、幾度目かのため息をつく。

「何だか、あれからため息ばかり出てる気がするなあ」

「美胡っちー、その年で独り言か？」

「へ？ あ……いい、いえ。何でもないです」

焦点が部長に合って、ここが美術室だと再認識した。

「美胡、絵のテーマ決まった？」

「あ、うん一応ね。愛華ちゃんは？」

「この前、外で良いもの見つけてさー。ほら、コレ見てよ」

その写真には、綺麗な黄色い花が写っていた。

「これは、山吹……かな？」

「正解！ この黄色がめちゃくちゃ綺麗でしょ。この写真だと、レモンイエローに近いかな？ この色を鮮やかに前に出して、下からのアングルで空を上にレイアウトして、こう……僕は小さな花だけど、空に向かって頑張ってるぞーって感じを描きたいんだよねー」

「あ、それいいかも」

愛華ちゃんの絵は力強くて、いつも元気をくれる。

「で、美胡は？」

「私？ うーん、まだ内緒」

「えー、教えてよー。美胡の絵は、美胡自身の心を映すからなー。モチーフ無しで描くなんて、あたしには無理だよ」

「そんな事ないよ。私が描きたいものは私の中にあって、それをそのまま紙に表現するだけ」

「謙遜しちゃって。ヨーシ、あたしも頑張るぞー！」

張り切って自分の作業に戻る。完成が凄く楽しみだ。

ツンツン。

「ひゃう！」

突然、ゾクゾクツとした感覚が背中から全身に走り、思わず背中が反り返る。振り向くと、やっぱりその顔があった。

「す、鈴川さん……」

(だよ。やっぱり来るよね)

「また見学？」

「応援だよ」

私の隣に座る。両足をブラブラさせて、プレゼントを開ける前の子供のように、目を輝かせてワクワクしているのが見てとれる。

「何だか随分と楽しそうね」

少し低くてトーンも変わらない冷たい声だった。何だか嫌味っぽく聞こえちゃったかも。目つきも悪かったような気がする。あの時から持っていた不愉快な気分を、鈴川さんにぶつけてしまった感じで悪い気がした。あ、いや元々の原因は鈴川さんであって、私はその被害を被っている訳なんだから、私が悪いと思うのもおかしいんだけど、鈴川さんに意地悪している気がして、それが申し訳ないと思わせるのであって……。はあ、何だかモヤモヤしてきた。

「白が楽しいのは、おねえちゃんと一緒だからだよ。おねえちゃんと一緒だったら、何でも楽しいよ」

恥ずかしい台詞をあっさりと言っただけ。どうしてそんなにストリートに言えるの？ 私は藤ノ宮さんに話し掛ける事すら出来ないのに。

「ねえねえ、今日はなにをするの？」

私の顔を覗き込むようにして聞いてきた。

「そうだな……、もう一枚水張りをしようかな」

「白もやってみたいな」

「え？ 慣れるまでは結構難しいと思うけど……、やってみる？」

「うん！」

「じゃあ、バットにこれを浸してくれる？」

水彩紙を渡す。

「あ、もつと優しく持って。折り目が付いちゃう」

「こう？」

手をお皿にして、その上に水彩紙を乗せている。そこまで丁寧じゃなくてもいいんだけど、自分が入部したばかりの頃と同じ事やっているのを見て、少し可笑しくなった。

「ゆっくり水の中に入れてみて」

「う、うん」

バットの水が水彩紙に染み込んでいく。少しずつ水の中に沈んでいった。

「わあ〜。おねえちゃん、白にもできたよ」

「水に入れるくらい、誰にでも出来るよ」

私も自分の分をバットに浸す。

「はい。このまま完全に水が馴染むまで、しばらく置いておくの」

「そっか〜。あ、あの絵はだれがかいたの？」

「ちよ、ちよつと走らないでよ」

展示スペースに並んだ、ある一つの絵を指差した。

「それは、私が描いたものだけど」

「うわあ〜。じょうずだね〜」

展示台に手を乗せて、その場でピョンピョンと跳ねる。

「周りの迷惑になるから止めてよ」

「あ、これはだれがかいたの？」

「それは愛華ちゃん」

「へえ〜。これもじょうずだね〜」

そう言いながら作品を眺めた後、あちこち歩き回ってから部員の作業を後ろから覗き込む。そうかと思えば、展示された作品を見てまたブラブラと覗いて回る。見学に来ている他の新入生は、部員の作業を後ろで静かに見ているのに、鈴川さんは何かやらかしそうで危なっかしい。私は慌てて鈴川さんの手を引っ張って、元の席に座らせた。

「あまり動き回らないでよ。制作中の作品を倒したりでもしたら大変なんだから」

「でも、頑張ってる時に応援するのが友達なんですよ？」

「そうは言ったけど、あんなの応援してるとは言わないよ。ただ邪魔してるだけ。集中力を削いでるだけ。あのね、作品にはその人自身の思いを込めて制作するの。もちろん私も同じ。もし、それを壊しちゃったりしたら大変なんだよ？ 同じものは二度と作れないし、描けないんだから」

「だって、応援するんだよ？」

「鈴川さんは、私を応援しに来てるんでしょ？ だったら私の傍にいないと駄目でしょ？」

「あ、そっか〜。エへへ」

何か複雑だ。子供をたしなめる母親みたいだ。もちろん、母親になつた事なんてないけど。

「そろそろ良いと思うよ、紙を出してみて。優しくだよ」

「うん」

「そうしたら、そのベニヤ板の真ん中に乗せて。……あ、ほら少し曲がってるよ」

「ん〜、むずかしいな〜。……これでいい？」

「うん、それ位でいいよ」

水張りテープを貼りながら、ある質問をしようか迷っていた。その答えは“する”か“しない”のどちらか。どちらかの答えが返っ

てくる。どちらかの結果が出る。

「……あのさ、ひょっとして入部……するつもり、とか？」

「ん？ ニユウブ？ んゝ、分かんないや」

「そ、そっか」

そっか、その答えもあつたんだ。肩透かしをされて体の力が抜けた。ただ、結果が持ち越されただけだけだ。

殆どの一年生は、部活見学が始まってから一週間程度で入部届けを提出するんだけど、活動が週に一度の部活もあるから、入部届けの受付は三十日までとなっている。だから、三十日には必ず結果が出る。

“しない”ならそれで終わり。もし“する”だったら……。やっぱり、先輩としてちゃんと面倒を見ないといけないんだろっなあ……。

四月二十一日(水)「白の絵」

「どうぞよろしくお願いします!」

パチパチパチパチパチパチ……。

「よろしく!」

「よろしくね!」

美術室内に拍手の音が響く。これで二人の新入部員だ。目標人数が達成出来て嬉しかった。私の隣で拍手している鈴川さんと目が合つて、お互いに微笑んだ。……と、彼女にこんな顔をしたのは初めてかも知れないと思い、ふっと目を逸らしてしまった。

入部したら、こうして部員達の前で自己紹介をする。鈴川さんがそれをしていないという事は、まだ入部届けを出していないという事だった。部活見学が始まってから毎回顔を出しているけど、どうするつもりなんだろう。横に目をやると、夢中になって拍手をしている。入部したなら先輩として迎えるつもりだけど、入部しないのならそれでもいいと思っていた。それは彼女が決める事だから。

「よし。これで部員が二桁になった。目出度い事だ。見学者諸君も、是非美術部に入部してくれたまえ! さて、新入部員には私から活動の詳細を説明しよう。他のみんなは引き続き作業に戻ってくれ」

各々が自分の作業に戻っていく。私も下描きを再開する。

「これ、髪が長いからおんなの子?」

私の場合、下描きをあまりし過ぎると、その下描きの線自体が塗りの邪魔になってしまう。その線が壁のような境界線になって、そこで色を止めてしまつて、水彩画の魅力の一つ、“滲み”が思うように表現出来なくなる。そんなたった一本の線にすら、私は制御されてしまう。

だからいつも、モチーフの外形や雰囲気、そのモチーフが人物な

ら何をしているのか等が、何となく分かる程度に軽く描いている。そんなうつすらとした下描きを見て、そこにいるのが“髪の長い女の子”だと分かった鈴川さんに、ちよつと驚かされた。

「あ、良く分かったね。うん、そうだよ。後ろには桜の木があつて、風で花びらと髪が舞っている感じかな」

自分の中にあるイメージを伝える。

「わあ、楽しみだな」

鈴川さんは、もう走り回る事も、他の部員の後ろから覗く事もなかった。ずっと私の隣に座つて、本当に静かに見ていて、時々こうして声を掛けてくる。私も集中力を削がれる事もなく、その質問に自然に答えていた。

（美術に興味が出てきたのかな？ それとも、私だから……なのかな）

ただ、こうしてずっと見られているというのも恥ずかしい。

「……絵でも描いてみる？」

「え、いいの？」

「あ、うん。見るだけじゃつまらないでしょ？ だから、鈴川さんも描いてみる？」

「かいてみたい！」

私は笑みを浮かべて、水張りされた水彩紙を前に置いてあげた。

鈴川さんは、私と目の前に置かれた水彩紙を交互に見て、「いいの？ かいてもいいの？」と目をキラキラさせながら繰り返す。絵を描くのはこれが初めてじゃないだろうに、どうしてそんなに喜ぶのだろう。

はたとその動きが止まった。キラキラがなくなって、水彩紙にジツと目を落としている。

「どうしたの？」

「えっと……、何をかけばいいのかな？」

何も分からないとでもいうように、少し赤らめた顔をこちらに向けた。

「何でもいいよ。鈴川さんが描きたいと思ったものを、好きなように描いていいんだよ？」

「好きなように？」

「うん」

「好きなように……好きなように。好きな……」

呪文のように繰り返している。なんだろう、そんな鈴川さんを微笑ましく思った自分がいた。

私も塗り作業に移る。今回の絵は、ブルーとピンクがメインカラー。既に持っているホルベインの透明水彩絵の具と、昨日買ったロイヤルブルーとシエルピンク。特に、ロイヤルブルーの深みと水で薄めた時の明瞭さが、イメージにピッタリだった。他には……ブリリアントピンク、カーマイン、ホリゾンブルー、バンドイキブラウン……、頭の中にある色を選んでいく。あとは、その時私の中に浮かんだ色を加えていこう。

鈴川さんかというと、ずっと水彩紙を見つめたまま、まるで何かのオブジェのようにじっと考えていた。考えるといっても、オーギュスト・ロダンの『考える人』のように思惟しているというより、目の前に沢山並んだオモチャの中から、どれか一つを選ぶのに悩んでいるといったふうだった。同じ“考える人”だけど、その二つの画のあまりの違いに、思わず吹き出しそうになってしまった。

「あー！」

一番好きなオモチャが決まったみたい。鉛筆をギュッと握って、紙の上に黒い線が描かれていく。あ、そんなに力を入れて描いたら、筆圧で水彩紙が潰れちゃう……。声を掛けようとしたけれど、鈴川さんの楽しそうな顔を見たら、それを止めてしまう事の方が良くないような気がして、そのままにしてあげようと思った。鈴川さんは、どういう絵を描くのだろう。気になったけど、出来上がるまでは見ないようにした。

パレットに出したシエルピンクに続けて、ブリリアントピンク、それとカーマインを出す。筆はホルベインの十号。たっぷり水を

含ませた筆で、水彩紙の桜にあたる部分を濡らす。その水が乾かない内に、水で溶いたシエルピンクを全体的に塗っていく。『Wet-in-wet（ウエットインウエット）』という技法。続いてブリリアントピンク、カーマインの順に、同じ技法で塗っていく。こうして塗ると滲みが出て、色同士の境界もぼやけて、私の好きな淡い雰囲気になるんだ。

「うん、いい感じ」

あとはまた描き加えていくとして、たっぷり濡れた水彩紙をドライヤーで乾かす。次はロイヤルブルー。……なんだか緊張する。

水で濡らしてから、その明瞭な青を、女の子の風になびいた長い髪に乗せていく……。

「できた！」

それまで黙々と描いていた鈴川さんが、出来上がった絵を両方の手で表彰状を持つようにかざす。

「出来た？ 見てもいい？」

「うん、いいよ」

絵を受け取ると、そこには人物が一人だけ描かれていた。

それは、とても高校生が描いたとは思えない、まるで小学校一、二年生位の子が描くような絵だった。顔の輪郭や鼻も歪で、腕も左右で長さが違う。何やらがちゃがちゃと描かれた服は、ようやくこの学校の制服だと分かる。お世辞にも上手いとは言えなかった。ただその表情は、口を大きく開けて、両方の目が山の形をしていて、とっても楽しそうな笑顔だった。そして、そこに描かれていたあるものが、私の目を釘付けにした。

「こ、これ……私？」

「うん！ そうだよ」

その顔には、眼鏡が描かれていた。この絵の私は、私にこんなにも笑顔を見せている。私はこの学校に入学してから、こんな風に笑った事があっただろうか。思い返してみても、自分がこんなに笑っ

た姿は私の中には一つもなかった。思い出せなかった。心から湧き出てきたみたいなの、本当に楽しそうな笑顔。それが解る。心底に伝わってくる。

「ど、どうして……私を、描いたの？」

「だって、大好きなんだもん」

ドクン……！

その瞬間、心臓が大きく鼓動を打った。それは……、それは私が描いているこの絵が、藤ノ宮さんをイメージしたものだ……。憧れの人を描こうとしていたから。だけど、私が絵に描いたのは“青い髪の女の子”で、“藤ノ宮琴葉”じゃなかった。本当は、本当は描きたかった。描きたかったの。だけど、自分の心をストリートに表現する事を躊躇って、本人を描く事がどうしても出来なかった。

好きなものを好きと言って、それをこんなにも素直に表現出来てしまう鈴川さんが羨ましくて……、そんな子が、私が好きだからと、絵を描いてくれた事が……、その事が……。

「あ、あれ……？」

急に視界がぼやけた。どうしてだろう、涙が溢れてくるなんて……。この涙は何？ 何の涙？ 自分が描けない絵を彼女が描いたから？ 自分の臆病さに？ うっん、多分違う。これは……、この涙は……。

「どうしたの？ おねえちゃん……」

不安そうな声。気付かれないように、顔を背けて零れようとしていた涙を指で拭う。

「ごめんね。白、絵がじょうずじゃなくて……」

「うっん、そうじゃない。そうじゃないよ。あのね……」

「ありがとう……、白ちゃん」

『ありがとう』も、『白ちゃん』も、私の耳に心地良かった。きっと、自然と口から出た言葉だったからだと思う。

素直で、無垢で、幼い子供のようで、どこか懐かしくて……。冬の雪が、春の暖かな陽光で少しずつ解けていくように、今まで固まっていた私の心が、ゆっくりとやわらかくなっていくような、そんな気持ちが私の中に灯っていた。

四月二十三日(金) 「消えた想い」

今日も隣には白ちゃんがいる。部活に顔を出すようになってから十日が経って、今日でもう六回目の見学。二回、多くても三回も来れば、大体その後は入部するか来なくなるかなのに、入部する気配もなくして見学だけ。入部するかは分からないと言っていたけど、届けの締め切りまではあと一週間。それを過ぎてしまったら、部活中の部室には入れなくなるんだよ？ 出来れば入部して欲しいなと思うけれど、強制は出来ないし……。こんなに楽しそうにしているのになあ。

その楽しげな本人は色を塗っている。私を描いたというあの絵だ。筆やパレットは部の備品を貸してあげた。絵の具は私のを。ランプブラックをこれでもかという位に出しちゃって……。もう殆どなくなっちゃった。筆にドロリと付いたその色を、私の髪に彩色しようとした所で、ハシッ！ とその手を取った。

「ほらほら、そんなに絵の具を付けたら乾かなくなっちゃうよ。こうして水で溶いて……。はいこれ位で十分だよ」

「おねえちゃん、ありがとう」

それはそれは上手じゃない絵だけど、本当に楽しそうだった。そんな白ちゃんを見ると、私の手に握られた筆も、滑らかに色を躍らせていく。自分の心を、素直に映し出せているのを感じていた。

「ねえ、おねえちゃん」

「ん？ なに？」

水入れで筆を洗いながら答える。

「『白ちゃん』って言って」

カタン。

手がぶつかって水入れが揺れた。危なかったあ。危つく水を零しそうになっちゃった。

「ど、どうして？ 呼ぶ時はそう呼ぶのに」

「え、今言つてよお」

「もう……」

一つ咳払いをする。体を白ちゃんの方に向けて膝に手をあてて、妙にかしこまってしまつ。

「し、白ちゃん」

「なあに？ おねえちゃん。エへ」

少しはにかみながら小首を傾げる仕草と、上目遣いが可愛い……。……って、何なのよ！ この付き合い始めのカップルみたいなり取りは！ もちろん、今までそんなやり取りした事ないけど……）

「白ちゃん、白ちゃん……」

「あ、ほらちよつと、じつとしてよ」

名前を呼ばれるのがよつぽど嬉しいのか、『白ちゃん』を繰り返しながら、何の踊りなのか、筆とパレットを持ったまま両手を左右に揺らしている。

「白ちゃん、白ちゃん」

「ほら、分かつたから絵を描こうよ。ね？」

「なに？ おねえちゃ……」

ガタン！ パシヤアアアアア……。

それは、ほんの一瞬の出来事だった。時間にして一秒にも満たない、たったそれだけの短い時間。

完成間近だった。深く艶やかな青い髪と、咲き誇った桜の花びらたちが春の風に舞い、散った花びらが、青い髪に重なり薄化粧を施す。髪を押さえた白く繊細な指と、微かに潤んだ瞳。ほんのりと桜色を帯びた唇は僅かに開き、その年齢よりも大人しやかな雰囲気を纏わせている。汚れのない真っ白なワンピースは陽光に透けて、太ももから腰への滑らかな曲線を浮かべ、裾がはためく柔らかなラインからは風さえも見て取れる。

それは、私の想いをありのままに映し出していた。映し続ける筈だった。

今、目の前にある桜と青い髪の少女に、大量の水が覆っている。

紺碧の海のような深く青い髪が、その髪を軽やかに舞わせている淡い桜が、瞳が……、唇が……、溶けて、流れて、混ざり合っている。私の想いを全て消し去っていった……。

その水が、倒れた水入れの水だと気付くのに、それから数秒の間が必要だった。振り向いた白ちゃんの手が当たって、水入れが倒れたのだ。

「あ……、あ、あ……ご、ごめんなさい……」

消え入りそうな声に、私の身体がピクツと反応する。それまで、混ざり合うブルーとピンクに抑えられて止まっていた私の時間が、一気に流れ出す。その猛烈な流れは、身体の動きも、顔の動きも、目の動きも、そして、口から発する言葉も、私の意思では制御仕切れないまま、私の外へと噴き出した。

「いい加減にして……!」

瞬刻の後、時間の流れが私の意識と重なった。な、なに？ 今、私は怒鳴ったの……？ 白ちゃんに怒鳴った。感情に任せて……。自分が何と云い放ったのか、その言葉を覚えていなかった。目の前に広がる光景と、その声に立ちすくむ白ちゃんの足だけを、私の視界が捉えていた。

「どうした!? 美胡っち!」

「美胡!?」

二つの声。あ、部長と愛華ちゃん……。他の部員も私の方を見ている。何か言っているみたいだけど、良く聞き取れない。私は椅子から立ち上がる事もせず、何色を塗ったのか、それがどこに塗られた色なのか、全く分からなくなってしまった、ただの汚れた水彩紙にまた目を落とす。あ、制服のスカートも濡れていたのか。今頃になって気付いた。

「どうした……って、これは……」

「うわ……。これはもうダメか……美胡、大丈夫?」

「……、ごめん……なさい」

それまで、私の視界の隅に捉えられていた白ちゃんの足が、よろ

よると下がって消えた。それから少しの後、上履きの音が走り出して、美術室から出て行ったのが分かった。

追うつもりはなかった。追ったところで何て言えばいい？ 叱責でもすれば気が晴れるの？ そんな事をしても何の意味もない。だってこの絵は、私の想いは、もう元に戻らないのだから……。

「取り合えず、掃除をしよう。まな、手伝ってやってくれないか？」  
「あ、はい」

色水が撒き散らされたテーブルと床を掃除していく。愛華ちゃんが手伝ってくれたけど、その間、会話らしい会話はなかった。「大丈夫？」「うん……」「描き直せそう？」「……」「掃除をしていた間に交わした言葉はそれだけだった。

「……ありがとう」  
「あ、うん。いいよ、気にしなくて」

白ちゃんが描いていた絵はなかった。愛華ちゃんが片付けてくれたのが、白ちゃん自身が持ち去ったのか……。分からないけど、楽しそうに笑っている私は、もういなくなっていた。

何かに引っ張られるような、それとも押されるような、おぼつかない足取りで部長の元にたどり着く。

「部長、今日は……早退しても、いいですか？」  
今日はもう、とても筆なんて握れない。

「ああ、無理はするなよ。来週は休んでもいいから。そういう時もあるんだから」

「すみません……。失礼します……」

学校から少し離れた場所。駅へ向かう途中にある、街の幹線道路へと続く一本の路地。私は、力の入っていない足で歩いていた。左右には戸建て住宅たちの、クリーム色の同じ顔が行儀良く並んでいる。どの家も外観に統一感がある。前から来る散歩中の犬が、家の門柱に鼻を寄せている。学校から駅まで歩いて十分、駅から電車で

十五分。そこから家まで歩いて十五分。通学時間四十分。一年間通って見慣れたはずの風景なのに、それらはとても淋しくて、少し小さく感じた。私の心が、私にそう映し出しているのだろう。

その住宅の並びに、一箇所だけぽっかりと空間がある。愛華ちゃん、モチーフ探しに行つたまま帰って来なかった、まつみや公園だ。戸建て三軒分の小さな公園には、入り口を挟んで右側に、ブランコと滑り台と二つ並んだベンチ。左側には花壇が広がっている。前を通る度に、花たちが心を和ませてくれていたのに、今はそう感じられなかった。ふと、ベンチに座っている人影が、私の目を留めた。向こうを向いて座っているから顔は見えないし、夕日でオレンジに染まっけていて本来の色とは少し違っていたけど、それが茶色い髪と白いカチューシャだと分かった。少しの躊躇の後、公園に足を向ける。声をかける事もせず、ただ隣に座った。

「お……、おねえちゃん……」

その声に、私の目は伏せたままだった。だけど、右隣の不安そうな雰囲気は感じ取っていた。揃えた膝に乗せられている手が、僅かに震えたのが分かった。そのか細い指が、随分と白く見えた。

「あ、あの……。ご、ごめんなさい」

しばらくの時間が流れた後、

「……さつきは、怒鳴ったりしてごめん」

「おねえちゃんは悪くない……。悪いのは白だよ……。だから、ごめんなさい……」

「ああなっちゃんだったのは仕方がないよ。だから、もう謝らなくていいよ。だけ……」

私は、後を続けた。努めて静かに。

「もう、あの絵は描けない。同じものは二度と描けないの。もう一度描こうとしても、同じものにはならないの……」

それは、私の絵が自分の心を映すから。こんな気持ちじゃ、同じ絵にはならない。

「もう、あんな事はしないで。制作者の思いを壊す事だけはやめて」

ひどく意地悪な事を言っている気がした。白ちゃんを責めている。「ごめんなさい……」

白ちゃんはそう言っていると、もう口を開かなくなった。

どの位の時間が経ったのか……。多分、ほんの一、二分。もっと短い時間だったかも知れない。それが随分と長く感じ始めた頃、後ろから聞き覚えのある声があった。

「美胡、やっぱり心配でさ。あの後あたしも早退してきた。……こんな所で何やってんの？」

愛華ちゃんは私の左側に立っていて、背もたれに手を掛けているようだった。

「見ての通りよ」

ぶっきらぼうな言い方だった。愛華ちゃんに当たっている自分が嫌になる。

「見ての通りと言われても……。今日はどうしたの？ らしくなかったよ。急に怒鳴ったりして……」

この場にいるのが辛かった。二人に対して、もっと嫌な人間になっっていく気がして。

「もういいの。同じものはもう描けないから。……もう帰る、ごめんね」

だから、ここから逃げる事にした。最低だ。

「あ……」

白ちゃんが何か声を掛けようとしたけれど、それに触れたくないかのように、そのまま出口に向かう。立ち止まりたい気持ちはあったけど、止まらない足が、それを打ち消してしまった。

「あ、一人で大丈夫？ 家まで送ろうか？」

「ううん、大丈夫。また来週学校で」

一生懸命に作り笑いを見せた。笑顔に見えていたか不安だった。今の精一杯の笑顔を見せたつもりだった。多分、笑った顔には見えていたと思う。

「……うん、分かった。必要なら何でも言いなよ。あたしは美胡の

傍にいたんだから」

「うん……、ありがとう……」

白ちゃんとは、結局目を合わせる事はなかった。

四月二十三日(金)「白の願い」

おねえちゃんがなくなつた公園は、急にさみしくなつた。

「スランプは、自分で何とかするしかないからなあ……。あたしも良く陥るよ」

いつも愛華ちゃんと呼ばれてたおねえちゃんが、そう言った。白は顔を向けたけど、何も言わなかった。何か言つても、届かないのを知つてたから。そのおねえちゃんは大きなため息を一つついて、つらそうな顔をしながら帰つて行つちやつた。

また一人になつた。『ごめん』つて言つてたけど、悪いのは白の方。あんなにダメだよつて言われてたのに、はしゃいで、おねえちゃんの絵を……。

こんなはずじゃなかつたのにな。白は、こんな事をするために、ここに来たんじゃなかつたのに……。おねえちゃんにひどい事をしちゃつた。どうしたらいいの？ どうしていいのか分からないよ。だれかおしえて。白におしえて。だれもおしえてくれないのは分かつてるけど、おしえてほしいよ。一人はやっぱりさみしくて、悲しくなつて……。

「うっ……。うっく、ひっ……。っく」

ほら、やっぱり涙が出てきやつた。どうしたらいいのかなあ……？ あ、なんか体がおかしいな。なんだか体がさむい。手が白くて冷たい。

「もう、あんまり時間がないのかも……」

体を小さくかがめて、両腕でぎゅっと自分を抱きしめた。涙がポタポタと落ちていった。

「おねがい、もう少しだけ待つて……。もう少しだけおねえちゃんと一緒にいさせて。だつて、だつて白はまだ……。おねえちゃんに恩返しをしてないから……。おねがい……」

首に手をあてると、鈴があつた。チリチリ、チリリ。鳴らしてみ

た。緑のリボンと一緒に、ちゃんとここに付いてた。良かった……。あ、今度は体がふわふわして、力が入らなくて、目の前が真っ白になってきた。ブランコも、すべり台も、お花たちも、みんな真っ白に見える。頭の中もグルグルと回っている感じがする。どうなっちゃうんだろう。このまま、もうおねえちゃんに会えなくなっちゃうのかな……。？ そんなのイヤだよ……。おねえ、ちゃん……。おねえ……。ちゃ……。  
気を失って地面に倒れる白を、夕日だけはやさしく見ていてくれた。

## ある光景「プレゼント」

「ママー、また神社に行こうよ」

石段の前で立ち止まった少女は、小高い丘の頂を指差しながら聞いた。

「ええ、いいわよ」

母親がそう言い終わった時には、少女は赤いランドセルを上下に揺らしながら、朱色の鳥居をくぐっていた。鬱蒼とした木々のトンネルを抜けるように、七十段もの石段を上っていく。その石段を上りきった所にある、もう一つの朱色の鳥居の向こうに、目的の場所がある。

「今日もいるかなー？」

長い石段を上った疲れを感じさせないまま、その神社へと駆けて行く。

「ふうーっ、どう？ 居た？」

ようやく上って来た母親は大きく息を吐いて、ややへばった体を落ち着けてから、娘の元へと歩いていく。

「あれ？ いない。昨日まではいたのに……」

少女の顔が曇る。

「きつと、今日は何処かで遊んでるんじゃないのかな？」

母親は娘の不安を感じ取り、慰めるように言った。

「今日も会えると思ったのにな……。あのプレゼント、気に入ってくれたかな？」

振り向き、大きくて澄んだ瞳が同意を求める。

「そうね。気に入ってくれたと思うよ。明日はお礼を言いに、きつと会いに来てくれるよ」

「そうだよ、明日は会いに来てくれるよね」

少女に笑顔が戻った。立ち上がって右手を差し出すと、母親の左手がそれを優しく包み込んだ。



四月二十六日(月) 「見えない心」

美術室には、二人が向かい合わせに座る四人用のテーブルが、横に四卓、縦に三卓、全部で十二卓並んでいる。テーブルで、木を削る音をテンポ良く響かせている者。窓際で、イーゼルに立てられたキャンバスに色を乗せている者。新入部員二人を加えた十人が、思い思いの場所で制作に取り組んでいる。私は、黒板から見て一番後ろの廊下側にあるテーブル。さらにその隅の、ドアが一番近い椅子に座っている。そのいつもの場所で、目の前の水彩紙をただ眺めていた。

部活中、何度目を向けたか分からない、黒板の上の掛け時計。この学校にもあるような丸くて白い文字盤に、黒いインデックスと針が、午後五時四十八分を示している。あと十分程で今日の部活が終わるのに、隣の椅子はテーブルの下に収められたままだった。

もう来ないのかな……。そうだよ。怒鳴っちゃったし、公園でもあんな別れ方をしちゃったのだから。私のせいだよ。白ちゃんも、絵を駄目にしてしまった事が後ろめたいのかも知れない。

だけど、この静かさは以前のように戻っただけなんだよね。白ちゃんが見学に来始めた頃、帰って欲しい、もう来ないで欲しいと思っていた。隣に白ちゃんがいないのは静かで良いはずで、自分が望んでいた事だったのに。それなのに、その空間は凄く広く感じた。隣の椅子が遠く感じた。水彩紙、時計、それとドア。その三つを交互に、繰り返し、繰り返し見ている内に、こんなにも時間が過ぎてしまっていた。

私は、出来るならもう一度あの絵を描きたいと思っていた。同じものにならないのは分かってはいたけど、まだ“描きたい”という気持ちがあった。イメージが憧れの人だからかも知れなかった。これも、もう何度試したか分からない事だけど、もう一度心の中に目を向けて、自分の想いを探しにいった。

「……はあ」

短くも深いため息をつく。やっぱりそこには何も見えなかった。真っ暗だった。

私は、私の心を描く。心に浮かんだものを表現するだけ。そして、心に見える時は私がそれを描きたい時。心に何も無い時は、絵を描きたくない時。ずっとそんな感じで描いてきた。

今、私は“描きたい”と思っている。心に何も無いのに描きたいと思っている。描きたいのに心が見えない。自分の中でどう対処したらいいのか全く解らなかった。空っぽの心を表すように、目の前の水彩紙には線一本、点一つさえ描く事が出来ずにいた。

突然のざわつきに顔を上げると、部員達が片付けを始めている。時計は、午後六時五分を少し回っていた。隣の席は、広くて、遠くて、淋しいままだった。

「どう？ 美胡」

片付けを終えた愛華ちゃんが聞いてきた。その問いの意味は解っていたし、愛華ちゃんも私の答えを承知しているかのように、真っ白の水彩紙に目を落としている。

「全然駄目だ」

「そっか……。んー」

何か考え込むように腕を組んだ後、指を鳴らした。

「よし、あそこに行ってみようか。ほらほら、片付けて」

「え？ う、うん」

絵の具を使っていないから、簡単に片付いてしまった。何も乗っていないテーブルは、今の私の心のように空っぽに見えた。

「ほら、早く早く！」

「ちよっと待ってよ、どこに行くのー？」

鞆を持って、昇降口を出て右に折れる。そのまま、コンクリート色の校舎沿いに駆けていく。右手に職員室と保健室の窓を見ながら、どこに連れて行こうとしているのかが、何となく分かった気がした。

このまま真っ直ぐ行けば、桜並木の終わりに校門がある。でも愛華ちゃんは、校舎が途切れた所で右に曲がった。そこで確信に変わった。右に曲がると直ぐに、校舎と体育館を結ぶ渡り廊下ある。地面に簀の子が敷かれ、その上にアーケードのような屋根があるだけだから、外からでも簡単に通り抜ける事が出来る。その簀の子を飛び越えた先で、愛華ちゃんが立ち止まった。

「ふうーっ。丁度、終わった所、みたいだね。あー疲れた」

荒い息で、途切れ途切れにそう言った。私は両手を膝に乗せて、呼吸と熱くなつた体を落ち着かせながら、右前方に四角く囲われた緑色のフェンスに目をやる。その内側には二面のテニスコートがあった。真新しい青いジャージ姿の生徒が、ボールの入った籠を持つてフェンスを出た所だった。

「青いジャージか。一年生だね。ほら、あそこに座ろ」

体育館の壁沿いに二脚並んだベンチを指差した。このベンチは去年の秋頃に設置されたものだ。体育館の反対側、桜並木を挟むようにして、園芸部が管理している園庭がある。緩やかなS字を描く歩道が園庭を二つに分けていて、それに沿った花壇と背の低い木々たち。生徒達の憩いの場になっていて、人気の昼食スポットでもある。その歩道にある十脚のベンチの内、二脚がここに移動された。

その理由は、藤ノ宮さんらしい。彼女を見ようとする生徒達が、フェンスに手を掛け部活の邪魔にならないよう、体育館脇に移動されたんだと聞いた。今は部活が終わったからか、誰も座っていない。私もこの一年間で、何度かテニスコートに行った事はあるけど、それでも校舎の脇から覗くのが精一杯だった。だから、実際に座ったのはこれが初めてだ。

誰もいないテニスコートが真正面に見える。コンサートのアリーナ最前席って、こんな感じなのかな？ その緑のステージに、藤ノ宮さんを思い浮かべてみた。サーブでボールを投げる姿が、マイクを高く掲げるアーティストのように見えた。

「ど、どうして、ここに？」

アリーナ席の座り心地に慣れてきた頃、当然湧いていた疑問を投げる。

「んー？ 何か掴めるかもって思ってたね」

それが、“絵を描けるようになるための何か”なんだと直ぐに理解出来た。こんな所に来たら、また緊張するだけのような気もしていた。でも、自分で突破口が見付けられない以上、愛華ちゃんに頼るしかなかったし、その気持ちが嬉しかった。

「そろそろかなー？」

テニスコートの向こう側には、校舎と並ぶように運動部の部室棟がある。二階建ての、校舎と同じコンクリートの打ちっぱなしで、二階へ上がる外階段が設置されている。フェンス越しのベンチからは良く見えないけど、その部室棟からざわめきが聞こえてきた。

制服に着替えたテニス部員がやってくる。吹奏楽部に次いで人数の多いテニス部。その人混みの中で、私の目は当然藤ノ宮さんを探していた。

「お、まなかあー！ 美胡ちゃんー！」

「お疲れー！」

クラスメイトと挨拶を交わす愛華ちゃん。私も控えめに手を振る。

「もしかして、出待ち？」

「まあ、そんなとこ」

出待ちだなんて……。沈めたばかりの顔が、また熱くなるのを感じた。

「そっか、もう来ると思うよ。じゃあねー！」

校門に向かう部員達の流れの中に、その人がいた。

（き、来た！）

そんな必要はないのだろうけれど、思わず背筋が伸びてしまう。白百合女子高校の制服は、結構可愛いと評判らしい。この制服を着たくて入学してくる生徒もいると聞くから、それは間違いないのだと思う。実際、私も可愛いと思っている。セーラーのような大きな襟の付いた、雪のように白いミニのワンピース。深紅の薔薇を思

わせる、深い赤色をした長袖のボレロ。胸元にはふんわりと結ばれた、大きな赤いリボン。ワンピースの襟と裾、ボレロの少し折り返された袖には、それぞれ赤と黒のチェック柄が入っている。黒いハイソックスと同色の革靴が、全体の可愛らしさを引き締めている。制服の方が霞んでしまうかのような、存在感と輝きが彼女にはあった。才色兼備のアイドルと、好きな絵すら描けなくなった私。同じ制服を着ている自分が、何だか恥ずかしかった。彼女の周りには、胸元のリボンが緑の三年生と青い一年生。学年を問わず人が集まってくるんだな……。私もあの中に入ってみたい。それは無理でも、せめて後ろを歩いてみたい。

(あ、ポニーテールにしてる)

部活中には、邪魔にならないように束ねているのは知っていた。背中の青い尻尾が、足を進める毎に左右に揺れて、普段の大人っぽさから年相応の美少女へと、雰囲気を変えていた。

「どう?」

「どうと言われても……。緊張しちゃうだけだよ」

視線を下に向けると、膝に乗せられた指が忙しなく動いている。眼鏡のレンズもうつすらと曇り始めた。

「そっか。切欠になればと思ったんだけどね。それにしたって緊張し過ぎだよ、愛の告白をするわけじゃないんだし。同じ高校生、同じ学年、同じクラスなんだし、美胡と何も変わらないんだよ?」

「だ、だってー」

「琴葉ちゃん、って手を振ってみなよ」

「む、無理だつてば」

「じゃあ、あたしが声を掛けてあげよう。おーい! 琴……!!」  
「駄目だつてば!」

愛華ちゃんの口を、飛び付くように手で押さえた。藤ノ宮さんとの接触以上に恥ずかしくて緊張する事態は、大袈裟かも知れないけど今の私にはない。あ、もし白ちゃんだったら、自分から藤ノ宮さんに声を掛けるのだろうな。ふと、そんな事が頭を過ぎった。自分

からは何も出来ないくせに、白ちゃんに偉そうな事ばかり言って…。  
…。何様のつもりなの？ 私って。

「ひぬー！ ひぬうー！」

その呻きのようなくもった声で、反射的に手を離す。

「死ぬー！ 口と鼻を同時に押さえたら死ぬって！」

「あ、ご、ごめん！」

慌てて愛華ちゃんから離れ、座りなおす。

「いや、私の方こそチョットやり過ぎたかも。ごめん」

「あ、気にしないで。私のためにしてくれているのは嬉しいし」

桜並木の方から、帰宅する生徒の声が小さく聞こえる。体育館の影はテニスコートまですっぽりと包み、一日の学校活動を終えようとしていた。

「テニス部のみんなも行っちゃったな。あたしらも帰ろっか」

「うん……」

愛華ちゃんと駅へ向かう道すがら、周りの電灯が点り出して夜の顔を見せ始めた。いつもの住宅街の、いつものまつみや公園の前を通る。もしかしたらとベンチを横目に見ても、近所の子供達らしき人影がブランコを揺らしているだけで、白ちゃんはいなかった。こんな時間だし当然だとは思いつつも、また座っていてくれたらと期待している自分がいた。

「もし、アイドルと友達になったら描ける様になるかな？」

「それ、切欠というより、私の一番の願いが叶っちゃってるよ」

「あ、そっか。まあ、そのうち描ける様になるよ。焦らずいこう」

「うん、ありがとう」

また絵を描けるようになるのだろうか。白ちゃんは次の部活に姿を見せるのだろうか。藤ノ宮さんと言葉を交わせる日は来るのだろうか。私は、一体どうすればいいのだろうか……。答えはおるかヒントさえも見付からないまま、夜に呑み込まれてしまいそうなくらい

不安だった。

四月二十九日（木・祝） 「描けない理由」

玄関の姿見でチェックをする。グレーのハイネックTシャツに、胸と裾にフリルが付いたピンクのチュニック。ネックレス。黒タイツ。ハート柄キルティングのトートバッグ。

「……よし」

黒縁の眼鏡を掛け直して、ショートブーツに足を通す。

「じゃあ、行つてきます」

「気を付けてね」

母に送られてマンションを出る。明け方から降り始めたという雨は、昼を過ぎても止まずに一定の冷めた音を立てている。眼前に広がる空と、濡れた建物や家々が一樣に灰色に染まっている。仕方なく傘を差し、雨の中を駅へと向かう。

私が住んでいるマンションは、市街地から少し離れた郊外にあつて、所々に森や山が見られる。それらは雨に濡れて、緑の濃い匂いを運んでくる。アスファルトの雨の波紋が、途切れなく側溝へと流れている。

元々、雨の日は好きじゃない。気分が暗くなるから。特に今は、雨になって欲しくなかった。それは、まだ絵を描けずにいたから。心に何もなかったから。白ちゃんが昨日の部活にも来なかったから。白ちゃんに怒鳴ってしまったあの日から、何も変わっていなかったから……。

駅のホームに下りると、丁度上り電車が滑り込んできた。祝日も関わらず乗客は少なく、余裕を持って座る事ができた。今日がゴールデンウィークの初日である事と、雨だから少ないのだろうか。目的地の、通学で使っている松宮駅までの十五分の間、ただ窓に打ち付けられる雫の跡と、流れていく家たちと、遠くに霞む山々を眺めていた。

徐々に現れ始めたビルが山を視界から遮っていき、この街で一番

大きな松宮駅に着いた。電車を降りて改札口へと向かう。この駅は三つの路線が乗り入れていて、都会の方へも行きやすい。私の家の方は少し田舎だけど、交通の便は良いと思う。大きな駅ビルも併設されていて、大抵のものはここで手に入る。

毎日の使い慣れた改札口を抜ける。旅行や帰省で人は少ないかと思っていたけど、普段の休日と変わらない賑わいをみせていた。正面に見える時計塔の下に立つと、愛華ちゃんにメールを打つ。

『今、待ち合わせ場所に着いたよ』  
返事は直ぐに来た。

『あたしも駅に着いたから、ちょっと待ってて』

昨日の夜、愛華ちゃんから電話があつて、気分転換にシヨップピングに行こうと誘われた。二人で出掛けるのはよくある事だけど、今回は私の事を気遣つての誘いなのだと“気分転換に”という言葉で理解できた。

「お待たせー！」

愛華ちゃんが視界に入る。白いプリントTシャツと、大きく開いた襟から覗く黒いタンクトップ。ショートパンツにボーダー柄のニーハイソックス。スニーカーと黒いシヨルダーバッグ。いつも元気な愛華ちゃんらしいコーディネートだった。

「おお！ そのピンクのチュニック可愛いじゃん。美胡はフリルが似合うよねー」

「そんな事ないよ。愛華ちゃんこそ、そのバッグが大人っぽくて凄く良いよ」

「ホントに？ この間、地元で見つけたんだよね。ま、安物だけだよ」

その時、時計塔からオルゴール調のメロディーが流れた。雑踏のために小さく聴こえる音色と、文字盤の周りで動く小人の形をしたギミックが、午後二時を告げていた。

「さて、どこに行きたい？ 服を見に行く？ 雑貨がいい？ カラオケでも良いし……って、それだと歌うのはあたしだけになっちゃう

うか」

愛華ちゃんは捲し立てるように話す。私を楽しませようとしてくれているのが解った。

「じゃあ、丁度絵の具を切らしそうだから、駅ビルの画材店でもいい？」

絵から離そうとしてくれていたのに、そんな事を言ってしまった。でも、愛華ちゃんはそれを快く受け入れてくれた。

「うん、いいよ。あそこの画材屋は品揃え豊富だし、あたしも見えて飽きないしさ」

その大手画材店は、駅ビルの七階にある。同じ階には本屋と雑貨屋、それとカフェ。その階の三分の一を占めようかという広い画材店に入った。目の前に広がる額やキャンバス、筆や絵の具。他にも沢山の画材を前にして、気持ちが悪く着くのを感じた。まだ絵を嫌いになっていないのが分かって、少し安心した。

この駅ビルが出来たのは、高校に入学してすぐの頃だった。中学までは、地元の小さい文房具店で買った十二色セットの絵の具を使っていたから、心の色を出すのに苦労していた。だけど、ここではそれが見付けられるから嬉しい。一通り回った後、目的の透明水彩絵の具を探す。広い店内だけど、何度も来ているからその場所はすぐに見付けられた。そして、一つの絵の具を手取る。

ランプブラック。あの時、白ちゃんが使い過ぎた色。その新品の絵の具を見つめながら、これを使う日は来るのだろうか、と思っ

った。

「何か良いのあった？」

「あ、うん。愛華ちゃんは？」

「あたしは、新しい筆と油絵の具を買っちゃった」

手に持った紙袋を、顔の横で揺らす。

「あ、私も買ってくるから待ってて」

「急がなくて良いよ。ゆっくり見ててよ」

「うっん、今日はこれが目的だったから大丈夫」

会計を済ませてお店を出る。

「次はどうする？　いつもの所？」

「そっだね」

トートバッグに、店名のシールが貼られた絵の具を仕舞う。

いつもの所というのは、同じ階にあるお気に入りのカフェの事。

画材店の後、カフェに入る。それがお決まりの流れだった。画材店で何も買わなくてもカフェには入る。うーん、それってカフェに入りたくて画材店に行っているという事？　いやいや、そんな事は無い。だって、一応女の子だし、スイーツは好きだし、ケーキが凄く美味しいから仕方がないよ、うん。

中に入ると、一番奥の席に案内された。カウンターもテーブルも椅子も、自然な木の風合いで落ち着ける。ただ、ここはオープンカフェだから、通路を歩くお客さんから見えてしまう。食べる姿を見られるのは恥ずかしいのだけれど、ケーキの美味しさと愛華ちゃんと一緒にだから入れる。

「今週のケーキ”は何ですか？」

「南瓜のミルフィーユになります」

「じゃあ、それとカフェラテで。美胡は？」

「あ、えーっと……。モンブランとカプチーノをお願いします」

店員が復唱して去っていった。

「この後はどうする？」

「私は特にないから、愛華ちゃんの行きたい所でいいよ」

「じゃあ、CDショップと洋服見てもいい？　って、美胡の好きな所に連れて行くこうとしてるのに、ダメじゃんあたし！」

「そんな事ないよ。良い気分転換になるよ」

「お待たせ致しました」

店員がケーキとコーヒーを置いてくれた。このコーヒーカップは凄く可愛くて、真っ白な陶器に花が描かれている。柄の種類も沢山あって、来る度に楽しめる。今日は、青い薔薇がカップの側面と

ソーサーに描かれていて素敵。

ケーキを食べた後、半分残っているカプチーノを一口飲む。少し心を落ち着かせてから、やっぱりこの話題を切り出した。

「あのさ、愛華ちゃん」

「なに？」

「愛華ちゃんは、描けない時どうしてるの？」

「あたし？ そうだなー。あたしの場合は、描いて描いて描きまくるか、全く描かないか。そのどっちかで脱出出来るかなー」

「描けないのに描くの？」

「もちろん、納得いくものは描けないよ。何度も何度も失敗する中で、自分の描き方を思い出していく感じかな？ “下手な鉄砲も数打ちや当たる” 精神で攻めるか、“描きたい！” って感覚が来るまで描かないで待つか、って所だね。美胡は？」

「私は今まで、描けない時でもそれがスランプだと感じた事はなかった」

「ん？ どういう事？」

カップを置いた手が止まる。

「えっと……。私は描きたいものは心の中に浮かんでくるんだけど、心に浮かんでいない時は描きたいものがないという事で、“描きたいのに描けない” という感じじゃなかったから……」

「なるほどねー。で、今は逆に“描きたいのに心に浮かんでこない” 状態に陥っている、と」

「うん……」

「それはキツイなあ」と、椅子の背もたれにもたれ掛かって腕組みをする。愛華ちゃんは、天井の方を見たりクシャクシャと髪を掻いたり、また腕組みをしたりしながら、突破口を見付けようとしてくれている。私は、愛華ちゃんとカップを交互に見つめ、次の言葉を待っていた。

「んー、何が違っただろうね」

「え？」

「いやね。描けていた時と今では、何が違うんだろうって。もしそれが見つかったら、描ける切欠になるかなーって」

「違う事……」

何だか重い気持ちがフツと消えていくような、私自身が少し軽くなったような感覚が体の中を流れた。ただ不安しかなかった心に、小さな明かりが灯った気がした。何が違うのかなんて分からないけれど、今の私にはそれで充分だった。

「うん、ありがとう。今までにない感覚だったから、自分ではどうする事もできなくて。少し前に進めそうな気がするよ」

雨の一日の中で、最初の笑顔だったような気がした。

家に戻って、絵の具を通学用の鞆に入れる。あれから洋服とCDを見に行っただけど、二人とも何も買わなかった。でも、私の収穫は大きかった。

部屋着に着替えてベッドに座る。顔を横に向けると、枕元に置いてある犬のぬいぐるみと目が合った。もうずっと昔に、母にせがんで買ってもらったものだ。本当は白いのだけけど、もう随分と黒ずんでしまっている。また洗ってあげなきゃ。少し黒色の剥げた鼻をツンとつつく。胸に抱いて頭を撫でながら、愛華ちゃんのことを思い出していた。

『描けていた時と今では、何が違うんだろうね』

何が違うのだろう。筆が踊るように描けていた頃と、全く描けないう。白ちゃんに絵を駄目にされて怒鳴ってしまったし、確かに気持ちが違う。だから描けなくなったんだ。それは理解できている。ただ、あの時気持ち軽くなったのは、他の何かを感じたからなんじゃないのかなあ？ 他の理由を……。

あの絵を描いていた時は、白ちゃんに悩まされながらも描けていたんだよね。流れるように筆が動いて、今までにない位に心を表現できていて……。そして白ちゃんが来なくなっ……。

「あ、分かった……」

白ちゃんがいないんだ。それが答えなのかは分からないけれど、描けない今、白ちゃんは隣にいない。白ちゃんが隣にいたから、あんなにも素敵な絵が描けていたのかも知れない。白ちゃんが隣にいたから、あんなにも素直に心を映せていたのかも知れない。

はっとして、壁に貼られたカレンダーに目を向ける。今日は二十九日。良かった、まだ間に合う。明日は入部届けの締切日。明日を逃せない。白ちゃんに入部を誘ってみよう。もちろん答えは彼女が出すべきだ。私は白ちゃんに怒鳴ってしまったし、白ちゃんは私に申し訳ない気持ちから入部しないかも知れない。でも、とにかく会ってみよう。ちゃんと謝ろう。もし入部してくれたら、良い先輩になろう。

「白ちゃん、入部してくれるかな？」

ぬいぐるみに話し掛ける。その小さく丸い目で、真っ直ぐ私を見つめてくれていた。

四月三十日（金）「鈴川白という女の子」

本当は、もっと早く行こうと思っていたのだけれど、いざ行動しようとする中々足を向ける事が出来なかった。一年生の教室へ行くというのは、かなり緊張する。

チャンスは沢山あった。沢山あったのに、どうしようか悩んでいる内に四回あった休み時間も過ぎてしまつて、五時限目の授業がもうすぐ終わろうとしていた。この後は部活があるだけ。部室で待っていては駄目だ。授業が終わつたら、心を決めて行かなければ。

授業の終わりを告げるチャイムが響いた。同時に生徒達が動き出し、教室内が騒がしくなる。私もそれに遅れないよう、鞆に教科書を入れて席を立つ。

「美胡、どこ行くの？」

教室を出ようとした所で、愛華ちゃんに呼び止められた。

「あ、うん。ちょっと用事があつて。先に部室に行つてて」

「そっか。オッケー」

まだ、生徒がまばらな廊下を進む。今日は入部届けの締切日。会つたら何と言おうか。『入部しようよ』『入部して欲しいんだけど、どうかな？』『怒鳴っちゃつてごめんね』ああ、どうしよう。言葉がまとまらないよ。

一階へ下りる階段に差し掛かる。あ、そういえば、白ちゃんはこのクラスなのだろう？ そっか、そんな事も知らなかったのか、私……。

一階に着くと、目の前には一年A組の教室。そこから右に、F組までの六クラスが並んでいる。私が一年生の時と変わらない位置に教室はあつて、ほんの一ヶ月前まではD組で授業を受けていた。それなのに、今はもう“他学年の教室”という、全く別の空間が広がっていた。他学年の教室なんて、これまで一度も足を踏み入れた事はない。何かこう、行つてはいけない場所という気がしていたから。

廊下には、教室から出てきたばかりの一年生が見られる。青いリボンの中で、一人だけ赤いリボンの私。それは、何か異物が混じったような、自分が異質な存在のように思えて、足を前に出すのを躊躇わせた。

でも、進めなければならぬ。時間はない。今日、もし白ちゃんに会えなかったら、もうずっと絵が描けないのではないかという思いが、私の背中を押した。

ここで一つの問題がある。A組とF組、どちらから行くかという事だ。帰ってしまう前に会わなければならないから、白ちゃんのクラスに近い方から行きたい。ところが私は、どうしてもか二択のうちどちらかを選ぶ時、大抵ハズレの方を選んでしまう。当たる確立は五十パーセントなのに。この前愛華ちゃんが、飴を片方の手に握って私に選べせた時も、十回連続で手に何も入っていない方を選んでしまった。『これって、ある意味クジ運良くない？』と、その飴をくれた事があった。

このままA組から回ろうか。それは単純すぎかな？ よし、敢えて一番遠いF組からしよう。と、その足を止めた。いや、ここで私がF組にしようと思ったという事は、それはハズレを選んだのかも知れない。だから、その反対のA組から行く方が正解のはずだ。

ぎこちない足の運びで、A組のドアの脇に立つ。うわあ、緊張する……。 “人” という字を手の平に書いて飲み込んだ。見たところ、白ちゃんは確認できない。誰かに声を掛けなきゃ。どうしよう、誰に声を掛けたらいいのかな？

「あの……。誰かに用事ですか？」

一人の生徒が声を掛けてきた。彼女にはきつと、ドアの前にいる拳動不審の上級生が、さぞかし不審に思えた事だろう。だけど、そのお陰で次の言葉を発する事ができた。

「あ、あの、白ちゃ……。鈴川白さんは、このクラスですか？」

下級生に敬語を使っていた。

「あ、ちよつと待ってて下さい」

「ねえ、ウチのクラスに鈴川って人いたっけ？」クラスメイトに確認していた。数人の生徒に聞いた後、こちらに戻ってくる。

「ウチのクラスにはいないですけど……」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

お辞儀をしてB組に向かう。ドアに一番近い机で、帰り支度をしている生徒がいた。

「あの、すみません。このクラスに鈴川白さんっていますか？」

緊張しながらも、聞く事ができた。

「えーっと、このクラスにはいないですね」

「あ、そうですか。ありがとうございます」

その隣のC組にもいなかった。あと三クラス。もしかしたら、F組から回った方が早かったのかも知れない。またハズレを引いちゃったのかな。どうしよう、今からF組に行こうか。だけど、D組かも知れない。そう考えると、やっぱりこのまま回るしかなかった。白ちゃん、まだ帰らないでいて。そう願いながら、D組に向かった。

私は、やっぱりクジ運が悪いみたい。一年F組と書かれた札の下でそう思った。あのままF組を選んでいればすぐに会えたのに。もう、どうしてA組から行っちゃったんだろう。

最後のクラス、一年F組。このクラスは美術部の新入部員、三石さんと立花さんのクラスだ。白ちゃんは、二人と同じクラスだったのか。その事について、白ちゃんは何も言っていなかったな……。

教室内を覗いてみる。まだ、結構な数の生徒が残っていた。良かった、まだいるかも知れない。その時、三石さんと目が合った。彼女は少し驚いた表情を浮かべた。それは当然だろう。部屋にいれば会えるのにわざわざ教室に来るといふ事は、余程の急用なのか他の部員には言えない内容なのか。そんな思いだったのかも知れない。

「如月先輩、どうしたんですか？」

「ごめんね、三石さん。あの、鈴川白さんと呼んで欲しいんだけど」「すずかわ……しろ、さんですか？ ちょっと待っててもらえます

か？」

「うん、ごめんね」

頭の中で、言う事を復習する。『あの時は怒鳴っちゃってごめんね』『入部届け今日までだよ。美術部に入って、一緒に絵を描こうよ』『うん、これでいこう。胸に手をあてると、その手を跳ね返すかのような強い鼓動を感じた。そのまま深呼吸をして、懸命に落ち着かせる。』

三石さんが戻ってきた。三石さんが来るという事は、もしかしたら白ちゃんは帰ってしまったのかも知れない。不安が過ぎる。

「すいません、先輩。その人は、ウチのクラスじゃないですね」

「……え？」

三石さんは何を言っているのだろうか？ 私をからかっているのだろうか……？

「うそでしょ？ 本当にF組じゃないの？ 帰ったとかじゃなくって？」

三石さんに詰め寄る。

「え？ はい……私、まだみんなの名前を覚えてないので、クラス名簿を見たんですけど……、いなかったですよ？」

「ど、どうして……？」

「どうしてと言われても……。他のクラスじゃないんですか？」

他のクラスであるはずがない。他の五つのクラスでは、鈴川白という生徒は“このクラスの一員ではない”という答えが出ているのだから。その上でF組の一員でもないという事は、一年生ではないという事……？ いや、それはない。彼女の制服のリボンは青。その時点で二年生でも三年生でもなく、一年生だという事を明確に示している。では一体どういう事なのか。元々この学校の生徒ではない彼女が、制服を着て美術室に来ていたという事なのだろうか。

「そ、そう……」

おぼつかない足取りで、ドアから二歩、三歩と離れる。

「先輩？ 大丈夫ですか？」

「あ、ごめん。どうもありがと……」  
混乱したまま独り言のように言った。

そつだ、他の部員達にも聞いてみよう。白ちゃんは、いつも美術室に来ていたのだから。生徒達の間を縫うようにして、美術室に向かう。

部室では部長と愛華ちゃん、他に数人の部員が歓談していた。

「おー、美胡」

愛華ちゃんが手を上げる。部活が始まるまで、あと十五分。鞆を肩に掛けたまま、歓談の輪の中へ入る。

「部長、鈴川白さんって、いつも美術室に来ていましたよね？」

「誰だい？ それは」

「誰って、部活中にいつも私の隣に座ってた一年生ですよ！」

思わず声を荒げる。

「いや、美胡っちはずっと一人だったぞ？」

「……え？」

何を言っているの？ 部長も私をからかっているの？

「だって、初めて部活見学に来た時、私が『見学したい一年生がいる』って美術室に来たのを見ていますよね？ それで部長は『見学者はどうしたんだ？』って……」

「部活見学？ ……ああ、あの時は見学者が来なかったからな」

「う、うそ……」

どうして？ わけが分からない。お願いだから、誰か白ちゃんの使用を認めてよ。そつだ、愛華ちゃんもあの時……。

「愛華ちゃん。私が公園にいた時、後から来てくれたよね？ あの時、隣に白ちゃんが座っていたでしょ？」

「美胡が叫んだ日の事？ ベンチには美胡だけだったけど。一人で凄く悩んでたみたいだったから、これはスランプかもって」

「じゃ、じゃあ、その日私が描いた絵の他に、もう一枚絵があったよねっ？」

それは、白ちゃんが描いた絵の事だ。

「あの時は、たしか美胡の絵しかなかったよ？ 他には、何も描かれてない水彩紙が何枚もあったけど」

「それじゃあ……、私と白ちゃんが話しをしていた事は？」

それについては、部長が口を開いた。

「話しというか、独り言だろう？ まあ、制作中の独り言なんて私もするしな。私も制作に集中していたから、美胡っちが具体的に何と言っていたのかは覚えていないし、さほど気にもならなかったな。ああ、そういうえば随分独り言が多いな、とは思ったが」

ことごとく白ちゃん存在を否定されていく。他の部員に聞いてもその答えは二人と同じで、そんな女の子はいなかったという。そんな……、どうして？ 何故？ もう、その思いしかなかった。いつも白ちゃんは美術室に来ていて、私の隣に座っていて、私と沢山話しをして、部長や愛華ちゃんも白ちゃんと話しを……。いや……、していない。会話をしていない。私以外の部員は、白ちゃんとは一切言葉を交わしていない。白ちゃんが部室内を歩き回った時も、私が怒鳴った時も、白ちゃんに何か言った人はいなかった。それは、そういう事だったのか。私がそう思っていただけなのか……。

みんなには、白ちゃんが見えていなかった。誰一人として、白ちゃん存在を認識していなかった。確かに白ちゃんはここにいたのに。私の隣にいたのに。私の絵を描いてくれたし、無邪気な笑顔を見せてくれていたのに。それなのに、部員からも、同級生からも存在を知らないなんて、あまりにも可哀想だよ。

もしそれが真実なら……、おそらく真実なのだろう。それなら、いつも私の隣にいた“鈴川白”という女の子は一体誰なの？ 今どこにいるの？ どうして私の前に現れたの？ どうして私と友達になりたいと言ったの？ お願いだから、誰か教えてよ。私に教えてよ！

思考は無秩序に入り乱れ、錯乱する。足は細かく震え力が抜けていく。

「美胡！ 大丈夫！？」

両肩を支えられた感覚が、渴を入れられたような圧覚に感じられ、遠退いた意識が戻ってくる。まだ虚ろな目をしながらも、はっきりとその意思を口にした。

「探さなきゃ……」

「美胡？」

「白ちゃんを探さなきゃ」

きつとどこかで淋しそうにしている。きつと私を待っている。たった一人で泣いている。誰にも見つけてもらえない女の子。私が探してあげないといけない！

部長に向き直る。

「すみません、今日は休みます」

「あ、ああ、分かった。次の部活はゴールデンウィーク明けだから、それまでゆつくり休むんだぞ」

「それならあたしも……」

「うっん、愛華ちゃん。答えは私が出さなきゃいけないから」

その言葉を遮る。これ以上の心配をかけないように、穏やかな口調と笑顔で。それ以上、愛華ちゃんは何も言わなかった。

美術室を出ようとした時、丁度入ってきた三石さんと立花さんにぶつかりそうになった。

「あ、ごめん」

そのまま横を通り過ぎる。

「先輩。鈴川さんはいましたか？」

三石さんの言葉で振り返る。

「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

何一つ大丈夫ではなかったけれど、そう言った。

校内を探す。帰ったとか帰らないとか、入部するとかしないとかは、もう関係なかった。白ちゃんに会わなければいけないという強い意志のみが、私を動かす力となっていた。白ちゃんと会ったのは、美術室と廊下だけだったし、私の前に現れなくなった今となっては、

学校内にいるのかさえ分からない。すれ違う生徒達の顔はどれも白ちゃんではなかった。廊下、トイレ、特別教室、テニスコート、園庭……、他にも探せる場所には足を運んだけれど、白ちゃんは見付からなかった。

「もう、学校にはいないのかな……」

廊下の窓から校庭を眺める。白ちゃんは、どこで何をしているのだろう。他にどこを探せばいいのだろう。

「あつた……」

この学校以外で、会えるかも知れない場所が一つだけあつた。昇降口に走り出す。駅へと向かう生徒を追い抜きながら、その場所を目指した。彼女と最後に会った場所へ。

まつみや公園の花壇には、今日も色とりどりの花が咲いている。

小さい子供が二人、遊具で遊んでいるのが見える。二脚並んだベンチには、誰かが一人座っていた。それは、肩口までの茶色い髪だつた。

（白ちゃん！？）

息も切れ切れに、ベンチへ駆け寄ろうと公園に入った時、期待が現実と入れ替わった。

「ほら、気をつけなさい」

そこにいたのは、子供に注意する三十歳前後と思しき母親だつた。

「あの、何か御用？」

ベンチのすぐ隣に立ちすくんでいた私に、そう問いかけてきた。

「あ、い、いえ。すみません……」

俯きながら答える。背格好は全く違うのに、同じ色の髪と同じ位置に座っているというだけで、勝手に白ちゃんだと思い込んでしまっていた。

「誰かと見間違えたの？」

その人は、穏やかに微笑んだ。

「……はい。この前、ここに座っていたものですから……」

「そう。会いたい人に会えないのは、とても辛い事よね。でも、その人があなたと会うべき人なら、きつとまた会えると思うよ。そう信じていればきつと、ね」

私がひどく淋しそうな顔をしていたのを見て、慰めてくれたのだと思う。だけど、たとえそれが根拠のない慰めであっても、今の私にとって、救いの手を差し伸べてくれたような、優しくてあたたかい希望の言葉だった。

「ありがとうございます……」

深くお辞儀をして、公園を出る。白ちゃんにもう一度会いたいです。きつと会える。そう胸に強く思いながら、また茶色い髪と白い力チューシャの少女を探し始めた。

## 五月五日（水）「告白」

あれから五日が経った。相変わらず絵は描けていない。心に何も  
ないから描けないのは当然なのだけれど、描けないというより、描  
こうとしていない。筆を握ろうとしていない。絵を描く事以外何の  
取り得もないのに、その絵すらやめてしまふのだろうか……。

ゴールデンウィークも最終日となって、毎日のようにTVを賑わ  
せていた行楽地の中継も、ニュースでの交通渋滞情報も、電車の混  
雑情報も、ようやく落ち着きを取り戻しつつあった。

私のゴールデンウィークといえば、家族と予定していた旅行も行  
きたくないとキャンセルしてしまったし、愛華ちゃんからの気分転  
換の誘いも断ってしまった。それは、どこかで一人ぼっちで泣いて  
いるかも知れないのに、私だけ出掛けるのが申し訳ない気持ちだっ  
たのと、どこに行ってもきつと楽しくないと思っていたから。

私はこの五日間、旅行や遊びの代わりに同じ行動を取っていた。  
それは、学校（活動を行っている部もあるから、校内には入れる）  
とまつみや公園。その二つの場所に行つて、探して、待つて、一日  
が過ぎていった。街の人々が湛えている笑顔が、すれ違うことに空  
っぽの心をえぐつていった。

そして今日も同じように、会えないまま過ぎようとしていた。自  
分の影が右に長く伸び、夕日に目を逸らす。沈みかけた太陽が、そ  
のタイムリミットを宣告しているようだった。

（もう、会えないのかも知れない……）

どこを歩いてきたかも覚えていない。いつの間にかそこを歩いて  
いた。左手に、私が通っていた小学校の校門があった。私はこんな  
所を歩いていたのか。マンションから出て、駅とは反対方向に歩く  
と小学校に着く。中学からは駅への道を使っていたから、この道を  
歩くのは随分と久しぶりだった。

小学校を通り過ぎる。運動をあまりしない足は、すっかり棒のようになつて脳に休みたい、帰りたいと訴えている。もう帰つてしまおうか。帰りたいという気持ちと、このまま帰つたら本当に会えなくなるという気持ちが、私の中でせめぎ合っていた。

帰る気持ちが勝ちそうになつた時、右手にある鳥居が目にと留まつた。昔は、もつと鮮やかな朱色だつたような気がしたけれど、その色は殆ど面影がなかった。その鳥居に手を当てる。木が剥がれた感触が、ガリガリと私を責め立ててくるようだった。お前はそうやって諦めてしまふのか、と。

そんな事言つたつて、仕方ないじゃない。こんなに探しても会えないんだもん。もう、白ちゃんは美術部には入れない。だから、会えたとしても何を言つたらいいのか、言葉が見つからないんだもん。足元には、所々に苔が生えた石段が上へと続いている。気付くと左足を一段目に掛けていた。足が重くて痛いのに、帰ろうと思つていたのに、周りの木々たちが作る薄暗いトンネルに入つていった。

石段を上がるにつれて呼吸も荒くなり、足も思うように動かなくなつてくる。私はこんな所で何をしているのだろう、白ちゃんを探さなきゃいけないのに。もしかしたら今、公園のベンチに座っているかも知れない。学校の廊下を走っているかも知れない。それなのに、私はどうして石段を上がっているのだろう。自分で自分の行動の意味が解らなかった。

鬱蒼としたトンネルが段々と途切れていき、夕日が足元まで届いてくる。そして、七十段目を上がり切つた所にもう一つの鳥居があった。その朱色も僅かしか残つていなかった。

(もう駄目……、もう歩けない)

悲鳴をあげる両膝に手をつく。荒い息づかいと一緒に、身体の上気と、額に汗がじんわりと滲んでいるのを感じた。

顔を上げると、鳥居の向こうには家一軒、いや二軒分くらいの開けた剥き出しの土。中央に神社が佇んでいた。小学生の頃までは初詣に来ていたけれど、中学に上がってから別神社に行くように

なったから、ここに来るのは、ええと……四年振り位になるのか。

(この神社、こんなに小さかったっけ……?)

約五メートル四方の建造物。周りの壁には角材が細かい格子状に組まれていて、正面には観音扉。萱葺き屋根の下には『日笠神社』<sup>ひかさ</sup>とうつすらと書かれた板が掲げられている。きらびやかな装飾は一切なくて、くすんだ木の色が全体を覆っていた。そして、観音扉から五、六十センチほど下の地面へと伸びる、三段の踏み段。その一段目に腰を下ろしている少女がいた。両手で、うずくまるように膝を抱えていた。

顔は見えなかつたけど、茶色い髪と白いカチューシャ。そして僅かに見える青いリボンは、ずっと探していた、ずっと会いたかったあの少女だった。

「白ちゃん！」

私は叫んだ。それと同時に上げられた顔は、素肌に白いカーテンを纏っているかと思紛うほどに青白かった。腕や脚も同じで、ボレ口の深紅が際立っていた。私の顔が視界に入ると、白ちゃんはゆっくりと立ち上がって、口を開けて驚いているような、瞳を潤ませて泣いているような、どちらとも取れる表情をしていた。

「お、おねえちゃん……」

二人の間は五メートルほど。棒になった足で駆け出し、その距離を縮める。会ったら何て言うかなんて全く頭にはなかったから、この言葉を言おうと決めていたわけじゃない。だけど、私がああ絵で描いていた、春の風が横を通り過ぎるように、落ちた桜の花びらがフワッと舞い上がるように、不意に、だけど自然に、とても素直に言葉として紡がれていた。

「白ちゃんは、私の友達だよ」

白ちゃんを抱きしめた。身体が少し冷たかった。それを温めるように、どこかに行つて仕舞わないように、ずっと一緒にいられるように、願いを込めて抱きしめた。

「ほんと？」

身体が離れる。私の首の高さにある、クリンとした大きな瞳が上目遣いに聞いてきた。

「うん、友達だよ」

初めて部活見学に来た日。私の顔を見つけた時の、ぱあっと明るい笑顔をまた見せてくれた。先輩だから、後輩だから友達になれないなんて、凄く小さい事だったのかも知れない。

けれど、学校からも随分と離れた場所なのに、どうしてこんな所にいたのだろう？ 私がどこに住んでいるかなんて知らないはずなのに……。

「どうして、ここにいるの？」

すると白ちゃんは、曇った表情に変わった。

「白、もう、ここからあまり動けないの。だから、おねえちゃんが来てくれて嬉しかった」

この神社から動けない？ それはどういう事だろう。白ちゃんの顔色が悪い事と、何か関係があるのだろうか。

「どこか具合が悪いの？ もしそうなら、私と病院に……」

言いかけた言葉を飲み込んだ。そうだ、白ちゃんは誰からも見えないんだ……。そう気付いたら、ある事を聞きたいという気持ちに駆られた。初めて会った時も同じ質問をしたけれど、今度のは意味合いが違う。聞いてしまったら、何か核心に迫ってしまいそうで怖かった。だけど、聞かなければいけないような気がした。

「し、白ちゃん。あなたは一体……、だれ？」

白ちゃんが俯く。何かを躊躇うように、そのまましばらくの時間が過ぎた。その表情を見てみると、聞いてはいけない事だったのかも知れないと思った。

「やっぱり、言わなくていい。今の私にとっては、もう知らなくて

いい事なんだと思う」

「それじゃダメなの」

首を振った。無造作に揺れた茶色い髪に、私の言葉は振り払われた。

「言わなきゃいけない事なの。もう、時間がないの。もうすぐ力がなくなっちゃうの。そうすると、ずっと会えなくなっちゃうから…」

…」  
そう顔を上げた白ちゃんは、悲しそうに微笑んでいた。

（力がなくなる？ 会えなくなる？）

私は、その後の言葉を聞きたくなかった。白ちゃんは一度目を伏せた後、また私に視線を戻す。私を見据える瞳には、強い意志が宿っているように見えた。初めて見た真剣な顔に圧倒され、言葉を遮る事も、耳を塞ぐ事も出来なくなっていた。

白ちゃんは、自分で自分の言葉を確認するかのように、ゆっくりと話し始めた。

「白は、おねえちゃんを知ってる。おねえちゃんも、白の事を知ってる」

学校の廊下で、初めて会った時に言われた言葉だった。

「白ちゃんと私は、会ったことがあるの？」

「うん、会った事あるよ。でも、今の白を見ても、おねえちゃんはきつと思いつけない」

悲しそうな微笑みはそのままだったけれど、強い意志はより増した気がした。

「白は、おねえちゃんの事をずっと見てたの。遠い所からだけど…」

（遠い所……？）

「白は、おねえちゃんに恩返しをしたくて、そこから会いに来たの」  
白ちゃんは俯いて、沈黙が支配した。恩返しをするためと言うけど、私はこれまで人から恩返しをされるような事をした記憶がない。

困っている人を見ても、声を掛ける事が出来ないような人間なのに。そんな私に、恩返しをする理由がどこにあるというの？

また私に目を合わせる。そこには、何かを心に決めたかのような、清々しい顔をした白ちゃんがいた。

おもむろに、白ちゃんは自分の首の後ろに両手をあてた。たどたどしく動いた後、その手が首から離れ、私の前に差し出された。そこにはチョーカーが握られていた。いや、チョーカーだと思っていたものは、単体で見ると随分違っていた。よく雑貨屋とかで売っている、プレゼントにかけるような緑のリボンに、これも雑貨屋ですぐ手に入れられそうな鈴。その天辺にある穴にリボンが通されているだけの、単純な作りだった。錆び付いた鈴だけではなく、リボンの色も白っぽく擦れていて、端は繊維が解けてボロボロになっていた。

「これは、おねえちゃんに返すね」

「か、返す……？」

その意味を理解出来ないまま、白ちゃんの顔とリボンに付いた鈴を交互に見る。部屋で見せていた無邪気な笑顔とは違う、優しく包み込むような微笑みを浮かべている。私が手の平を鈴の下に入れると、チリンと、くすんだ音と一緒に私の手に乗せられた。

その直後、鈴が僅かに光った。その光は、あっという間に何本もの柱となって、四方に発散していく。私の手も、白ちゃんの顔も、夏の太陽の下にいるかのように、黄色に照らされている。すると今度は、光が白く大きくなって、白ちゃんも、周りの景色も一気に飲み込んでいった。急に大量の光を吸い込んで、私の瞳が眩む。まばゆい光に目が慣れてくると、私の周りには真っ白な空間が広がっていた。

そこは、壁や天井があるわけでもないし、地平線や地面が見えるわけでもない。ただ白いだけ。白、純白、雪色、ホワイト……、これらの単語がどれも陳腐に思えてしまうほど、真っ白な世界に私一

人だけだった。それに、自分の足には立っているという感覚がなかった。立っているはずなのに、浮いているかのようにだった。自身身さえ視界に入らず、手を目の前にかざしてみても、足元を見ても、そこにあるのは白い世界だけだった。

(な、なに？ これ……)

私は怖くなって叫んだ……、はずだった。確かに『白ちゃん！』と叫んだのに、自分の声が聞こえなかった。

私が“ここに居る”という意識しか、ここにはなかった。

すると、濃いミカンの色のような、オレンジ色の世界へと変わった。そこに緑色が混ざってくる。続いて赤が現れ始める。そして茶色、黄色、他にも様々な色がマーブリングのように、幻想的に絡み合っていた。一定の速度で、絶えず混ざり合うマーブル模様は、次第に速度を落としていく。そして、少しずつ、少しずつその色たちは、ある風景を形作っていた。

そこは、さつきまでいた神社だった。だけど、幾つか違っている部分がある。まず、私の視点が違う。境内を俯瞰ふかんするように、鳥居と神社を眺めている。鳥居の朱色は鮮やかで、神秘的な色を主張している。周りの木々は黄色や赤に色付いて、紅葉の綺麗な顔を覗かせ始めていた。

そして、白ちゃんがいない。その代わりに、踏み段の脇に座り込んでいる一人の少女が、神社の床と地面との空間に、顔をうずめる様にして何かを見ていた。背中を覆ってしまうかのように大きな赤いランドセルが、少女が動く度に右に左に揺れている。

顔は見えない。誰だろう？ すると、私の事が見えたのか、何かを感じたのか、ふと少女がこちらに顔を向けた。

(あ、あれは……、私？ そうだ、小学生の頃の私だ……)

この頃の私は、時々学校帰りに遊びに行っていた。多分、一、二

年生の時だったと思うけど、いつからか行かなくなってしまった。

小学生の私は、私の事は見えていないようだった。しばらくこちらに目を向けた後、小首を傾げてまた視線を戻した。

## ある光景「三日間」

### 一日目

美胡は何かを感じた。誰かに見られているような感覚に、その方向を見上げた。当然誰かがいる筈もなく、オレンジ色に染まる空と時折そよぐ風に葉が揺れているのが見えただけだった。不思議そうに首を傾げた後、美胡はまた神社の床下に視線を戻した。

その視線の先には、うづくまる子犬がいた。その子犬は土で茶色く汚れていたが、肌に近い部分は白い綺麗な毛で覆われていた。首輪は付けておらず、野良のようだった。

「お母さんとはぐれちゃったの？」

美胡は手を伸ばし、子犬の頭を撫でる。子犬は警戒する様子もなく、その優しい手を受け入れていた。

まだ秋の入り口とはいえ、一人では寒くて死んでしまつかも知れないと思い、

「ちょっと待っててね。ちゃんと待ってるんだよ」

そう言ってからもう一度頭を撫でて、石段を駆け足で降りていった。

暫くして、美胡が戻ってくる。ランドセルは背負っておらず、手には濡れたフェイスタオル、バスタオル、ミネラルウォーターのペットボトルを持っていた。

「あゝ、タオルが冷たくなっちゃった」

お湯で濡らして来たのだが、着いた頃には大分冷めてしまっていた。そのタオルを開き、温かい部分で子犬を拭いた。徐々に、本来の白い毛並みに戻っていった。

バスタオルを敷いて、その上に子犬を乗せる。柔らかい感触が気に入ったのか、伏せをしたり、寝転んだり、自分の匂いを付けてい

る。

「あ、どうしよう」

ペットボトルの蓋を開けたものの、入れ物を持って来ていなかった事に気付いた。仕方なく美胡は、自分の手の平に少しあけ、子犬の口元に寄せた。子犬は鼻をヒクヒクと動かし匂いを嗅ぐ。水は、小さな指の間から土の上へと零れていき、飲む前に全て無くなってしまった。もう一度手の平に入れる。同じように匂いを嗅いで、今度は小さい舌を覗かせながら、不器用に飲んでいった。

飲み終わると、美胡は子犬を抱いて頭を撫でる。子犬もお礼を言うように美胡の顔を舐めた。

「くすぐったいってば」

暫くの間、神社の境内は美胡と子犬だけの空間となっていた。

「明日も来るから、ちゃんと待ってるんだよ」

美胡はそう約束し、家路につくのだった。

## 二日目

美胡は、首に掛けられたマンションの鍵を取り出すと、鍵穴に差し込んだ。ドアを開け、誰もいない家に入る。両親が共働きの美胡にとっては、それが当たり前前の日常となっていた。この後、大抵は近所の友達と遊ぶのだが、ランドセルを自室に置くと、入れ替えに母の手作りのトートバッグを手に取る。それに台所のスープ皿を入れ、足早に家を出た。

途中のコンビニでドッグフードの缶詰とミネラルウォーターを買った。これで今月の小遣いは使い果たしてしまったが、トートバッグに手を入れてその存在を確認すると、美胡は満足そうな顔で約束の場所に向かった。

神社の床下には、あの子犬がいた。バスタオルの上に寝そべって

いる。美胡の足音を聞くと、顔を上げて床下から姿を見せた。白い尻尾を左右に振り、美胡の足元で喜びを表している。

「待っててくれたんだね」

美胡も嬉しそうに、持って来た缶詰を開けて子犬の前に置き、その横にミネラルウォーターの入ったスープ皿を置いた。子犬は二、三度匂いを嗅いだ後、貪り付くように御馳走を平らげていく。

美胡は食べる様子を見ていたが、気付いたように立ち上がった。境内を歩き回り、手頃な枝を拾うと子犬の元に屈んで、土のキャンバスに絵を描き始めた。

子犬は、空になった缶詰とスープ皿には興味が無くなった様子で、動く枝を目で追っている。

「描けた！」

その絵は、目の前で“お座り”の姿勢で美胡を見つめている子犬だった。

「これは……あ、まだ名前を付けてあげてなかったね。うん……」  
子犬の喉を指先で撫でる。白い毛並みが、美胡の指に滑らかに絡む。

「そうだ、毛が白いから“シロ”がいいね。これはシロの絵だよ」

### 三日目

授業参観の後の、母親との帰り道。美胡は、シロが待っている神社へ母親を連れて行く。

「ほらほら、ママこの子だよ！」

神社のいつもの場所で待っていたシロが、駆け寄って来た美胡の胸に飛び込んだ。ようやく石段を上ってきた母親は、美胡の顔を舐めているシロを見た。

「うわー、随分小さい子犬ねえ」

「シロって名前だよ。美胡が付けてあげたの」

「シロっていうの？ 多分この子、産まれてから半年も経ってないんじゃないかなあ？」

美胡に抱かれたシロを撫でながら、そう言った。

「美胡よりもおつきい？」

「美胡よりはちよつと小さいかもね」

「そっかあ。じゃあ、美胡の方がおねえちゃんだね！」

“お姉ちゃん”という響きに、美胡はくすぐられた。

「シロちゃん、美胡がおねえちゃんだよ」

そう言っつてシロを抱きしめた。シロも愛情を精一杯返そうと、尻尾を振りながら美胡の顔を舐める。

「あ、そうだ」

美胡はスカートのポケットから、緑のリボンに通された鈴を取り出した。昨晚、家にあつた物で作った、即席の首輪だった。シロの目の前で夕日を浴びる金色の鈴は、揺れる度にその色を変化させた。チリリン、と澄んだ音色と共に、シロの首に巻かれた。

「はい、これで友達だよ。シロ」

五月五日（水）「恩返し」

私は、また白い世界に戻された。さつきと同じような真っ白な世界。だけど今度は、足にはしつかりとした感覚があった。

白い世界が、急に色を取り戻した。そこは、現在の私いまがいる神社だった。目の前には白ちゃんが立っている。青白い顔のまま、私を見つめていた。眉尻を下げて悲しそうで、口元は微笑みを湛えている。私は切なくて、嬉しくて、申し訳なくて……。白ちゃんを強く抱きしめていた。

「ごめんね。ごめんね、気付いてあげられなくて……。ありがとう、また会いに来てくれて」

閉じた目から一滴の涙が零れた。私が鈴をあげた次の日から、どこかへ行ってしまった子犬のシロ。沢山探したけれど、とうとう会えなかった。毎日を泣いて過ごしていた時、オモチャ屋で白い犬のぬいぐるみを見つけた。小さくて、“お座り”をしている姿が、あの時のシロに凄く似ていた。それは、今も私の枕元に置いてある。

これからは、一緒にいられるんだ。他の誰からも見えないけれど、私には見える。鈴川白という女の子を見てあげられる。触れてあげられる。それなら、私はずっと傍にしよう。

ふと、さつきまで冷たかった身体が温かい。目を開けると、白ちゃん光がぼんやりとした光を纏っていた。

（なに……？）

その光のベールから、テニスボール大の光の玉が、シャボン玉のような七色の光を発しながら、フワフワと空に舞っていた。しばらく上まで昇ると、空に溶けるように消えていった。それが二つ、三つと発せられたかと思うと急に増えていって、私達の頭上には星空が広がっているようだった。

よく見ると、光の玉はベールから発せられているのではなく、白ちゃん自身からだだった。発するというより、逃げていくといった風

だった。光の玉が逃げていくにつれて、白ちゃんが後ろの景色を吸い込んでいく。後ろの景色に溶けていく。透けていく。白ちゃんが消えようとしていた。

「嫌……、待って、行かないで！」

涙はもう止まらない。離れたくない。

「ごめんね、おねえちゃん。白、もう帰らなきゃ」

白ちゃんは、泣き出しそうな顔だったけれど、優しい笑みで別れを告げた。

「どうして？ 折角会えたのに……、どうして行っちゃうの？」

「それは……、鈴を外したから。鈴の力が、白から離れたから」

「じゃあ鈴なんていらない！ 白ちゃんが持つててよ！」

「ダメなの」

私の想いは、その強い意思の前にあっさりと消されてしまった。

「もう、力が残ってないの。白が付けてても、明日までには消えちゃう」

そんな……、そんなの嫌だ！ 私は、空を舞う光の玉を集めようとしたけれど、触れる事ができなかった。両手をバタバタと泳がせるだけで、昇っては消え、昇っては消えていった。

「白は、おいしいゴハンをくれて、遊んでくれた恩返しをしに来たの。おねえちゃんと、もう一度遊びたかったの。おねえちゃんと一緒に絵を描けて、白はすごく楽しかったよ」

「恩返しをしたいなら、ずっとここにいてよ……。絵なら、絵なら一緒に……、沢山描いてあげるから……。だから、行かない、でよ……」

止め処なく零れ落ちる涙で、顔はぐしゃぐしゃになっていた。

白ちゃんが少しずつ消えていく。茶色い髪が、白いカチューシャが、クリンとした大きな瞳が、微笑む口が、華奢な腕が……。全てが光の玉となって空に昇っていく。

「白の恩返しは、鈴を渡す事なの。おねえちゃんがくれた、友達の印。おねえちゃんと白の想いが、いっぱいしまった鈴。その鈴は、

友達を作るためのお守りだよ。おねえちゃんに、きつと勇気をくれるよ」

光の玉とは違う、別の光が白ちゃんの頬を伝っていた。泣いているようだった。けれどその言葉は、はっきりと紡がれていた。

『友達を作るためのお守り』

私に何を伝えたいのか、何を望んでいるのかが解った気がした。真っ直ぐ過ぎるほど真っ直ぐで、健気で、無邪気で、明るくて、私にないものを沢山持っている女の子。ずっと一緒にいられたら、どんなに良いだろう。

だけど……、だけど、私が本当に白ちゃんの事を大切だと思うなら、その想いを無駄にしちゃいけないんだと思った。その想いに応える事が、私からの恩返しなんだ。

悲しみの涙から、ありがとうの涙へと変わっていった。

もう、白ちゃんの顔も、身体も、手足も、すっかり消えてしまい、光の玉がぼんやりと集まっているだけになった。私はその光たちを、そっと包み込むように抱いた。壊してしまわないように優しく、とても優しく……。

「ありがとう、白ちゃん。ありがとう……、ありがとう……」

白ちゃんが消えていく。私の腕から消えていく。最後に残った、小さな光の玉が離れていく時、声が聞こえた。

「おねえ……ちゃん、あり……が……と……」

私は、両腕を空高く広げて、空に昇っていく光を送り出した。夕日のオレンジと重なって、本当に綺麗で純粋な想いだった。

私の頬を、また涙が零れた。その涙も、キラキラと綺麗だったらいいな、と思った。

五月六日（木）「白がくれたもの」

最終話

いつもと同じ学校。いつもと同じ教室。いつもと同じクラスメイト達。いつもと同じ昼休み。だけど私自身は、いつもと違っていた。「なんか良い事でもあった？」

向かいに座る愛華ちゃんが、私の顔を覗き込む。私はどうやら、お弁当を食べながら笑顔が零れていたらしい。

「良い事なのかは分からないけど、私の中で、何かが変わったような気がするんだ」

「ふーん。でも、その顔を見てると良い方に変わったって感じがするよ」

「そ、そうかな？」

愛華ちゃんは、お弁当箱を鞆に仕舞う。私も、少し遅れてお弁当箱の蓋を閉じる。それを仕舞おうと鞆を机の上に置くと、緑のリボンに付いた鈴が、チリリとくすんだ音を立てた。

「なに？ その汚い鈴は」

鞆の取っ手に結ばれた鈴を見て、そんなに汚い鈴を付けている理由が解らない、とでも言うかのように、顔をしかめながら聞いてきた。

「これ？ これはね……」

しばらく鈴を見つめた後、私は微笑んだ。

「私の大切な、友達と勇気のお守り」

もう一度鈴を鳴らす。私には、心地良い音。純粹で、真っ直ぐで、心に響く音だった。

「私は間違ってたんだと思う。好きなものを好きと言う事、自分の気持ちに素直になる事と、その為の少しの勇気。これって大切な事なんだよね」

「突っ走り過ぎなければね」

白ちゃんと出会った時の事を思い出して、私はくすっと笑った。

「……私、やっぱり藤ノ宮さんと友達になりたい」

一番の願いを口にした。愛華ちゃんは、これから私が取るうとしている行動を悟ったのか、

「あたしも一緒に行こうか？」

そう言ってくれた。私は、お守りを鞆から外して、両手で握った。

「ううん、大丈夫。この鈴が勇気をくれるから」

手の中があたたかい。両方の手の平から、白ちゃんの想いが私の中に流れてくる感じがした。

そして、私はまた微笑んで、憧れの人の机へと足を向けた。

三ヶ月後

第二十五回 全国高等学校芸術祭

水彩画の部 最優秀賞

作品名 『 憧憬 少女と桜 』

私立白百合女子高等学校 二年 如月美胡

FIN

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5580p/>

---

ともだちのしるし

2011年9月15日03時26分発行